

# ちきゅうとながよし はじめのいっぽ

(地球と仲よし 初めの一步)

## 幼児期の環境学習・教育実践事例集 -



兵 庫 県

# もくじ

はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

## 第1部 ひょうごの環境学習・環境教育・・・・・・・・

第1章 ひょうごの環境学習・環境教育の推進・・・・・・・・・・ 2  
第2章 幼児期における環境学習・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5  
第3章 ひょうごっこグリーンガーデン実践事業・・・・・・・・・・ 6  
第4章 環境学習・教育を進めるために  
～管理職としての取組～・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8  
第5章 環境学習・教育に取り組むために  
～幼稚園教諭・保育士に求められる力～・・・・・・・・・・ 10

## 第2部 効果的な環境学習・教育を進める具体的手法・・13

第1章 幼稚園・保育所で環境学習・教育を進めるための考え方・・・・ 14  
第2章 幼稚園・保育所で環境学習・教育を具体化する方法・・・・ 16  
第3章 具体的実践に向けての保育者の心得・・・・・・・・・・・・ 22

## 第3部 幼稚園・保育所における環境学習・教育の実践事例・・25

第1章 自然を通して、生命の不思議さを感じる・・・・・・・・・・ 27  
(高砂市立北浜保育園)  
第2章 四季を通して自然とかかわろう・・・・・・・・・・・・・・ 31  
(加東市立三草保育園)  
第3章 一年を通じた環境教育～身近な自然からはぐくむ小さなところ～・・ 35  
(Y M C A 松尾台幼稚園)  
第4章 地域の自然から学んだこと～自然体験活動を通して～・・ 39  
(三田市立藍幼稚園)

資料編・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 43

## は じ め に

兵庫県では、自ら「体験」、「発見」し、自ら「学ぶ」環境学習・教育を進めることにより、環境や生命を大切に思う“こころ”を育み、学習から実践へとつなげていくことを基本理念に幼児期からシニア世代までのそれぞれのライフステージに応じて体験を基本とする環境学習・教育を展開しています。

特に、生涯にわたる人間形成の基礎が培われる幼児期から小学校低学年の子どもたちを対象として、お米や野菜の栽培、動物や花木に触れるなどの自然体験等を通して、生命の大切さに身をもって気付く幼稚園・保育所での環境学習・教育(「ひょうごっこグリーンガーデン実践事業」)および地域の自然に出掛けて行き地域の人々等の協力を得ながら自然観察や栽培・飼育などの自然体験活動を通して、環境の大切さを知る小学校3年生での環境学習・教育(「環境体験事業」)に平成19年度から他の都道府県に先駆けて取り組んでいます。

この事例集は、ひょうごっこグリーンガーデン実践事業の定着を図るとともに、これまで取り組んできた幼児期の「ひょうごの環境学習・教育」を理論付け、体系化することにより、それぞれの幼稚園・保育所で環境学習・教育を進めるうえで有効活用してもらうためのものです。

そのため、ひょうごの環境学習・教育のねらいや理念を明確にするとともに、幼児教育の中で環境学習・教育を進めるうえでの具体的な手法やポイントを示しています。

幼稚園・保育所においては、子どもたちが生命の大切さや不思議さに気付く、自然の大きさ・美しさ・不思議さなどに気付く、地域の中での自然やそれにかかわる人々に親しみをもつという他者とのかわりに気付くといった<自然体験>からの「気付き」、また、生活の中で環境やその変化に気付く、資源を大切にしようすることに気付くといった<社会体験>からの「気付き」に至るよう、幼児の“気付き”に対する先生方の共感も含め自然環境や社会環境との“出合わせ方”に留意し、地域の特性や園の独自性を生かした環境学習・教育に取り組まれることを期待します。

## 第1部 ひょうごの環境学習・環境教育

### 第1章

### ひょうごの環境学習・環境教育の推進

#### 1 持続可能な社会の構築に向けて

私たち人間は地球上に生きている。この地球上では、大気・水・土・生物、そしてこれらがつくりあげる生態系がつながり、かかわり合って、地球環境が成り立っている。

しかし、今この地球では、様々な環境問題が発生している。その原因は、このつながりとかかわり合いのバランスが崩れてきていることによるものであると言われている。

私たちが恵みを受けているこの豊かな地球環境は、祖先から受け継がれてきたものであり、将来を生きる子どもたちがその中で生きていくことができるようにする責任がある。

私たちは環境を介して世代を超えてもつながっている。私たちはこのことを意識し、そのためにも過去に学び、今に学んで、未来からの宿題に取り組み、「持続可能な社会」を構築していくことが必要である。

#### 2 環境学習・教育とは

「持続可能な社会」の構築には、社会を構成する個人、家庭、民間団体、事業者、行政等が環境問題への取組を自らの問題としてとらえ、自発的に行動し、お互いの行動を理解し、立場を尊重し、適切な役割分担をすることにより主体的に参画することが必要である。

環境問題を考えるうえで何よりも大切なことは、自らが当事者であり、自らの問題としてかかわるという当事者意識である。環境学習・教育は、この意識の醸成に有効な手段と考えられる。

なぜなら環境学習・教育は、人間と環境とのつながりやかかわり合いのバランスという認識に立ち、自らが責任ある行動をもって、持続可能な社会の創造に主体的に参画できる人の育成を目指す「学び」であるからである。

環境問題は、現在進行形のテーマであり、一つの答えがあるものではないことから、環境学習・教育は、問題解決型の学びと言える。従って、指導者が知識を説明し、行動規範を示すといったことだけでなく、指導者と学び手が共に今を生きる自らの問題としてとらえ、いかに行動につなげていくかということを考えていくことが大切である。

このため、環境学習・教育での学びにおいては、自らが体験することにより、発見し、気づき、理解し、環境を意識した行動へとつながる「体験型」の学習が有効であると考えられる。

環境学習・教育は、単に自然と触れ合ったり、知識や情報を習得したりするだけではなく、これらを通じた「発見」や「気づき」により共感し、学び手の感性に届くものであるとともに、価値観に届くものであると言える。

従って、幼稚園・保育所における環境学習・教育を進めるに当たっては、いかに、日常の保育の中で、また、家庭や地域での幼児の生活の中で、子どもたち自らの「発見」や「気づき」を支援し、実践に結び付けていくかが大切である。

#### 3 兵庫県における環境学習・教育

兵庫県では、阪神・淡路大震災の経験などから子どもたちが自らの体験を通して「命の大切さ」

---

に気付き、行動することができるよう、様々な体験活動を学校教育や社会教育を通じて行ってきた。

新たに、平成18年度から、自ら「体験」、「発見」し、自ら「学ぶ」環境学習・教育を進めることにより、環境や生命を大切に思う“こころ”をはぐくみ、学習から実践へつなげていくことを基本理念に、体験活動を基本とする「ひょうごの環境学習・教育」を展開している。

また、全国に先駆けた兵庫県独自の取組として知事部局と教育委員会の連携体制を整え、小学校3年生での「環境体験事業」、幼稚園・保育所での「ひょうごっこグリーンガーデン実践事業」、幼稚園と保育所の指導者が共に学ぶ「環境学習リーダー研修」などを実施している。さらに、幼稚園・保育所、学校が地域住民やNPOなどと連携し、地域の自然や資源を活用した体験型環境学習・教育の充実にも努めている。

#### 4 環境学習・教育を通じて学ぶ「命の大切さ」

環境学習・教育が「命の大切さ」に自ら気付くことのできる手段となるのはなぜだろうか。

「命の大切さ」に気付くためには、自らが他者とつながり、かかわりあっていることに気付くことが必要である。そのためには、例えば、園内でのウサギやリスなどの飼育を通して、その命の温もりや成長、まれには死を直接体験することにより、「命」に身をもって気付く、また、水辺や里山の自然の中で四季の移り変わりや生き物との触れ合いを直接体験することにより、水辺や里山に息づく「命」に気付くといった例が挙げられる。

これらは、同時に「命」あるものが様々なつながりやかかわりの中で存在し、これらがなければ存在ができないことや自らもまた、そういったつながりやかかわりのなかで存在しているという「気付き」への大きなきっかけとなる。さらに、

これは、人間社会においてお互いを思いやり、尊重し、命や人権を大切に作る心の基礎を培う大切な「気付き」へとつながるものでもある。

私たち人間は、地球上に生きる生物の一つとして、地球上の自然環境や資源、他の生き物とつながり、かかわり合いながら生きている。このつながりとかかわり合いの循環が断ち切られたとき、私たちは大きな問題に直面することになる。

「命の大切さ」を考えることは、環境問題を考える原点とも言えるものなのである。

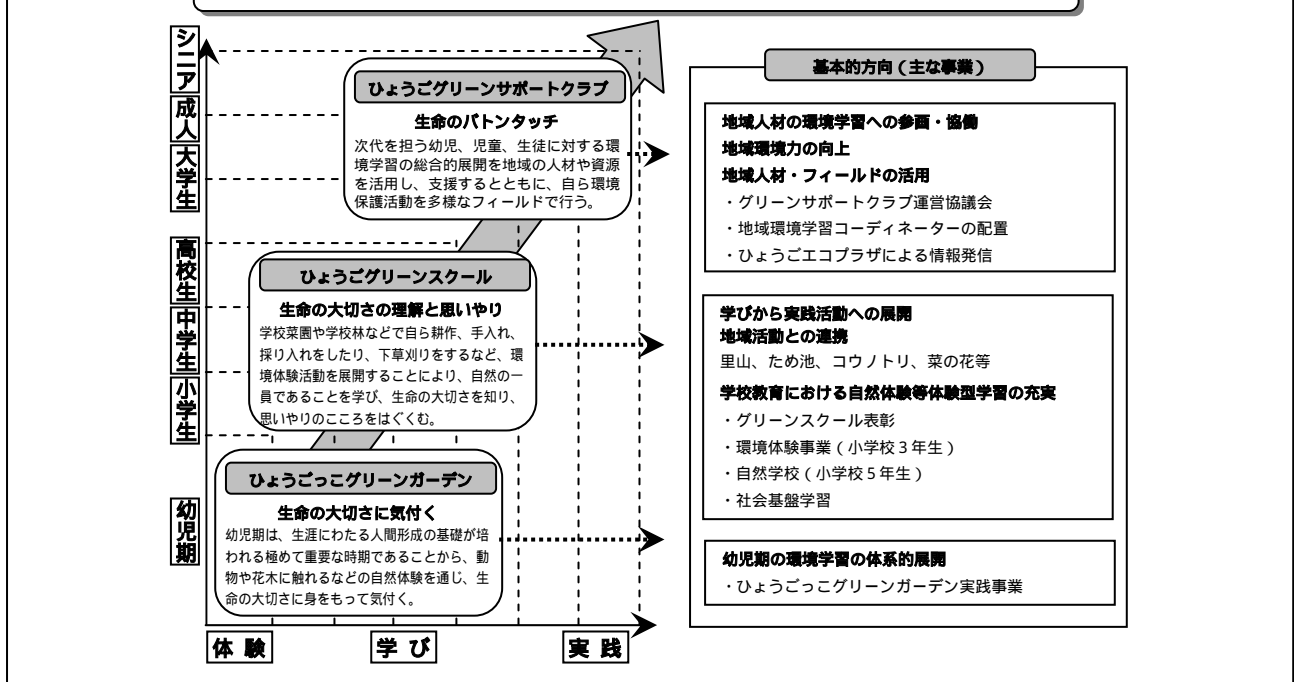
#### 5 生活の中で実践できる人材を育成する環境学習・教育の展開

幼児期における環境学習・教育にとって大切なことは、「命の大切さ」に気付くことにつながる、自然の美しさや不思議さ、他者とのつながりやかかわりを発見したり、共感したりする体験を通して、豊かな感受性をはぐくむことである。自然や他者に対する豊かな感受性とそれから生まれる豊かな想像力がなければ、環境問題に対する知識や解決のための技術をいくら知ったとしても、問題解決への行動には結び付かない。

幼児は、あらゆる生活場面において周囲の事物や他の人と多様な方法でかかわっている。そして、そのかかわりの中で様々な発見を促す体験が含まれている。

幼稚園・保育所での環境学習・教育の実施に当たっては、この体験の機会を活用し、実践することができると思う。なぜなら、幼稚園・保育所における子どもたちの生活の多くが「環境」とかかわっているからである。遠足や園外活動のような特別な行事でなくても、登降園・昼食・散歩・遊び等の毎日の園生活は、地域の自然や草木花、水、食べ物、電気、紙、ごみ等とのかかわりやつながりがある。つまり、園生活は、深く「環境」とかかわっている。幼稚園・保育所での子どもた

## ひょうごの環境学習・教育の総合的推進 - ひょうごの環境学習 -



ちの生活や活動を「環境学習・教育の観点」で見直すことが幼稚園・保育所における環境学習・教育の第一歩となると言える。

環境学習・教育は、環境を意識した行動ができる人を育てることが重要である。子どもたちの生活の場でもあり、「環境」とのかかわりが多い幼稚園・保育所で、環境学習・教育を進めるためには、日常的、継続的に取り組むことが大切である。そのためには、毎日の活動を「環境学習・教育の観点」でとらえ直し、日々や年間の教育計画・保育計画を立てることが大切である。従前から実施してきた遠足などの園外活動や七夕などの年間行事についてもその時期や場所だけでなく、「環境」への意識を日常的、継続的にもって計画・実施することで、子どもたちが命や環境の大切さを意識した行動をとることができるきっかけになる。ただ、このような取組を実践するためには、一職員、一管理職だけでできるものではない。環境学習・教育を効果的に展開するためには、園全体のものとして取り組んでいくことが必要である。

### 6 「連続性」を意識する

教育の目的は、子どもというものは連続的に学

び、育ち、成長するものであるとの認識に立ち、子どもの育ちや学びを促し、子どもの成長を支え導くことである。兵庫県では、兵庫県で生まれ、育つ子どもたちに対して、幼児期、児童期等の発達段階に応じた「ひょうごの環境学習・教育」を体系的に推進している。(上表参照)

幼児期はこの原点と言える極めて重要な時期である。保育者が幼稚園・保育所における環境学習が小学校の環境教育とどのようにつながるのかを意識して保育に取り組むことで、保護者からの幼稚園・保育所への信頼にもつながると考える。

さらに、幼稚園・保育所における「遊び」を主導的活動として展開される生活と、学校における集団生活の中で「学習(教科学習)」を主導的活動として展開される小学校低学年教育とのスムーズな接続を図る一助となると考える。

今後、幼稚園・保育所での環境学習・教育を小学校3年生の「環境体験事業」とリンクさせながら進めることが重要である。

## 第2章

### 幼児期における環境学習

#### 1 幼児期の環境学習をどのようにとらえるか

幼児期の教育において、自然や動植物とのかかわりは欠かせない。幼児にとって自然や動植物とのかかわりは、その対象を命あるものとしてとらえ、心を動かし、多くのことを気付く経験につながっている。幼稚園・保育所においては、このような幼児が自ら「気付く」活動を大切に考え、日常的に行っている。

幼稚園では幼稚園教育要領、保育所では保育所保育指針に基づいて保育が行われ、これらの中に、「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」の領域が示され、幼児期に育てたいねらい・内容等がまとめられている。幼稚園・保育所関係者は環境と聞くと、この領域「環境」と結び付けて考えがちであるが、幼児期における環境学習の「環境」のとらえは、この領域「環境」だけを指しているものではない。むしろ、幼稚園・保育所で日常繰り返し広げられる「気付き」を大切に生活そのものの中に、環境学習につながる体験が含まれている。日々の生活を環境学習の観点で見直すことが、より幼児の生活を豊かにしていくと考える。

#### 2 環境学習の観点で保育を見直す

幼児期の生活のほとんどは遊びである。幼児は周囲の事物や友達と思うがままに多様な仕方で応答し合うことに夢中になり、時の経つのも忘れてそのかかわりを楽しむ。幼児が遊ぶときには、心も頭も体も働かせて活動するので、心身の様々な側面の発達にとって必要な経験が相互に関連し合っ

総合的に発達していく。

幼児の一つ一つの活動の中には、様々な発達を促す体験が含まれている。その体験を「環境学習」という観点で見直し、幼児に気付かせたいこと、身に付けていきたいこと等を明確にし、見直しをもった保育を行う必要がある。

#### 3 家庭・地域の教育力との連携

幼児期は自然体験と生活体験の両者の積み重ねにより、人と環境とのかかわりについての理解と関心が深まっていく時期である。幼児期の環境学習を進めるに当たっては、自然体験、生活体験の両者を関連させることが重要である。

また、環境学習の推進には、教育機関だけでなく家庭や地域が相互に連携しながら取り組んでいくことが大切である。そのためにも、幼稚園・保育所での取組を発信し、家庭や地域の教育力を保育に生かしていくことが有効である。

この事例集で取り上げた幼稚園・保育所における環境学習の事例では、自然体験と生活体験の内容を以下のようにとらえ、日常行っている園の活動を環境学習の観点から見直している。

##### < 自然体験 >

- ・生命の大切さや不思議さに気付く
- ・自然の大きさ・美しさ・不思議さなどに気付く
- ・地域の中の自然やそれにかかわる人々に親しみをもつ

##### < 生活体験 >

- ・生活の中で環境やその変化に気付く
- ・資源を大切にしようとする

## 第3章

# ひょうごっこグリーンガーデン実践事業

### 1 ねらい

「ひょうごっこグリーンガーデン実践事業」は、県下の幼稚園・保育所が主体的に新たな観点からの環境学習・教育に取り組むきっかけとするため、幼稚園・保育所での環境学習・教育の取組に対して、実践にかかる経費を補助することで、幼児期の環境学習・教育の全体的な展開を図ろうとするものである。

### 2 新たな観点～「日常性」「継続性」～

「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」には、「環境」について、ねらい・内容が示されている。

この領域「環境」と区別するため、ひょうごっこグリーンガーデン実践事業では、「環境学習・教育」を次のように概念規定している。

日常的に行っている幼稚園、保育所の活動を「環境学習」の観点から、年間を通じて、また、1日の中で「日常性」や「継続性」を意識しつつ、田畑での農作業体験や動物、花木に触れるなどの自然体験等を通じて、「生命の大切さ」に身をもって気付く力を養う。

このことは、実践園に指定されたから、まったく新しい環境学習・教育の取組を始めなければいけないということではなく、従前から取り組んでいる行事や日常の保育内容を「環境」という新たな観点で見直すことで、子どもたちや保育者が同じ取組であっても「環境学習」という違った意識をもってとらえ直すことができ、保育活動の中での意識や行動の変化へとつながっていく。

本事業のねらいは、「環境」を意識した園生活、活動が日常的、継続的な取組になっていくことである。

このねらいを達成するためには、一過性の遠足、体験活動等は当てはまらないということに留意する必要がある。例えば、遠足を核にする場合であれば、日常の園における取組とつながりをもった園外活動として遠足を位置付けるといったことが必要である。

また、本事業を進めるに当たっては、当初に事業計画の提出がある。ここでは、昨年までは子どもたちの活動は収穫だけだったが、種まきも全員で実施する、園外から指導者の指導をする講師を招くといった活動の幅の広がりを意識して計画を立てることが求められる。

また、日常性、継続性という意味では園だけでなく、子どもたちが毎日を過ごす家庭や地域とも連携しながら取り組んでいくことが有効である。そのためには、園での取組を家庭や地域にも呼びかけ理解してもらうことも大切である。

### 3 支援体制

県では、地域において、円滑に年間を通じて環境学習を展開できるよう、支援体制を整えている。（巻末資料編参照）

実践を進めるうえで、継続的な農作物の管理や栽培の指導等、専門的な知識や技術など幼稚園・保育所の中だけですべてを行うことは難しい場合が出てくると思われる。そのため、以下のような支援があるので、活用してほしい。



(1) 地域環境学習コーディネーター

人材や活動場所の紹介や実践内容の相談対応により環境学習・教育の実践を支援するため、各県民局に配置している。

(2) ひょうごグリーンサポーター

環境に関する専門知識をもっている方や自然体験の指導など子どもたちの環境学習・教育を支援したいという意欲をもつ方を各県民局で登録している。

(3) 研修会の開催

幼児期の環境学習・教育を進めるうえでの具体的な手法を学んだり、受講者自らがプログラムを体験したりする参加体験型の研修会を開催する。(平成19年度の内容は下表参照)

4 実践園での効果

「平成19年度ひょうごっこグリーンガーデン実践園」へのアンケートによると、次のような効果があることが分かった。

実践により、これまでよりさらに活動の幅が広がった。

「環境」を意識して取り組んだことで、職員全体で話し合いの場をもつなど園全体で取り組むようになった。保育者の意識や子どもたちとのかかわりが増え、これに伴い、子どもたちの意識・行動にも変化が現れるようになった。保護者や地域の方々にもサポートをお願いし、これを通じて取組が家庭や地域へも広がった。

多くの実践園が から のいずれかについて効果があったとして回答している。

実践園としての取組は1年限りのものである。しかし、園の活動や子どもたちと「環境」とのかかわりには終わりは無い。

本事業はあくまでも園の行事や毎日の生活を「環境学習・教育」の観点で見直し、環境学習・教育に取り組むきっかけとするものである。

本事業で得られた効果やつながりを活用し、取組の継続を期待したい。

平成19年度幼稚園教諭・保育士環境学習リーダー研修

(本事例集では、「環境学習リーダー研修」と表記)

1 開催会場

- (1) 県立嬉野台生涯教育センター
  - (2) 県立有馬富士公園
  - (3) 県立ゆめさきの森公園
  - (4) 西宮市立甲山自然の家
- 各会場とも3日間開催(1)は、宿泊で実施)  
参加者は3日間を通して参加

2 進め方

- ・各会場とも同一内容、参加体験型(ワークショップ)で実施
- ・各会場1ファシリテーター(進行役)が3日間を通して担当

3 参加者の心構え

- ・主体的であること
- ・遊び心を忘れないこと
- ・お互いから学び合うこと
- ・教えられる 学ぶ
- ・暗記する 考える
- ・知識の蓄積 意識の変化

4 プログラム

(1日目) 幼児期における環境学習の必要性について理解する	
アイスブレイク	アイスブレイク
講義	幼児期における環境学習について
事例紹介	幼児期の環境学習の事例に学ぶ
講義	兵庫県環境学習・教育について
(2日目) 環境学習リーダーとしての基本を押さえる	
実習	参加者自身の環境観をとらえ直す
実習	自然との触れ合いを体験する
講義	参加体験型学習の基本的な考え方を学ぶ
(3日目) 園での環境学習の具体的な展開を考える	
全体会	環境問題をテーマに全員参加型パネルディスカッションを行う
グループワーク	園の1日・1年を環境の観点で見直す
全体会	グループワークでのアイデアをわかちあう

## 第4章 環境学習・教育を進めるために ～管理職としての取組～

保育にかかわる現場における環境学習・教育の現状はどうだろうか。一部熱心に取り組んでいる幼稚園・保育所はあるが、大半の幼稚園・保育所では、対象年齢が幼児でもあること、周囲に自然環境がないこと、環境学習・教育の指導計画や展開方法の難しさなどの理由で十分な取組がなされていないのが、現状だと思われる。確かに幼児期での環境学習・教育すべてが、子どもたちに理解されることは少ないかもしれない。

しかしながら、幼児期での環境学習・教育で経験した様々な体験が、今を生きる子どもたちの将来の備えとなるはずである。

ここでは、幼稚園・保育所で、実際に環境学習・教育を進めていくうえで、園の管理職がどのようなことに取り組んでいくべきかについて記すこととする。

### 1 環境学習・教育を進めるうえで必要な条件を整える

#### (1) スタッフ全員が「環境問題を考える」という当事者意識をもち、意識を高めていくこと

管理職・幼稚園教諭・保育士・調理師など、幼稚園・保育所にかかわるすべてのスタッフが、環境学習・教育に取り組むという共通意識が必要である。それは、私たち自身が環境にかかわっている当事者であること、また、環境問題を自らの問題としてとらえるという当事者意識が環境学習・教育を進めるうえで大切であるということである。

環境学習・教育に取り組むことを通して、スタッフも日々の環境への意識が高まり、子どもへのかかわりやスタッフ自らの意識や行動の変化にも

つながっていくと考えられる。そのためにも、子どもたち自らの気付きや発見を促すこと、その発見を新たな気付きや行動へとつなぐものであるという意識をスタッフ全員がもつことが必要である。

#### (2) 園の運営自体を環境に配慮したものにすること

幼稚園・保育所で環境学習・教育に取り組むうえで何よりも大切なことは、まず私たちの幼稚園・保育所が、「地球にやさしい幼稚園・保育所を目指している」というキーワードを掲げることであると考える。

現在、環境問題に対して世界的規模で様々な対策が立てられ、実行され始めている。国や地方自治体の施策、そして企業レベルでも環境に対して様々な取組が試されている。このような社会情勢の中、環境への配慮が、不十分な企業は、存在すら許されなくなる時代を迎えつつある。

幼稚園・保育所も環境とかかわりをもつ事業者であり、子どもたちに恵まれた地球環境の中で生きていく未来を受け継いでいくためにも、園の管理職は、園自体が環境問題に取り組んでいく責任があるということを認識し、経営計画や年間目標に環境に配慮した取組を盛り込み、園全体として実践していくことが必要である。

#### (3) 保護者や地域を巻き込んだ取組とすること

幼稚園・保育所において、環境学習・教育を1年間通して継続して実施することは大切なことだが、子どもたちの生活は、幼稚園・保育所だけではない。家庭や地域の中で過ごす時間もある。幼稚園・保育所と家庭や地域が一体となって環境学習・教育が継続的に取り組んでいくことが大切で

---

ある。そして、幼稚園・保育所での環境学習・教育の取組の姿勢を保護者や地域の方にきちんと伝えていくことが大切であり、その取組が保護者に、そして地域社会に広まっていく「継続性」といったものを大事にしていきたい。

## 2 指導者自身の感性を高めるため、子どもたちに備わる「ちから」を活用する

環境学習・教育は、知識的授業ではない。草花や畑の野菜や野の虫に、子どもたちの興味を引き付けていくことが大切である。それには、保育者自身がまず自然に興味をもたなくてはならない。

日本での幼児教育の祖である倉橋惣三は、「自然を愛し、自然に興味をもつことは、子どもたちの教育者として、もっとも大切な資格の一つである」と言っている。

また、幼児期の子どもたちは、「花を踏んだら花が痛い」といったように対象を自分に置き換えて考えることができる発達年齢にある。このような子どもたちがもつ感性を生かすためには、保育者自らが、自然の不思議や美しさに共感できる感性を磨いていくことが大切である。

## 3 今までの幼稚園・保育所の「環境」の在り方を考え直す

環境学習・教育に取り組むには、子どもたちが、自然と触れ合うことが必要である。子どもたちと自然を出会わせるには、二つの方法があると思う。一つ目は、「子どもたちを自然に連れて行くこと」遠足や散歩などの方法である。二つ目は、「自然を子どもたちにもってこること」である。

自らの幼稚園・保育所の園庭を見回してほしい。日本の基本的な園庭の様に周囲に大型の固定遊具を配置し、中心部はグラウンドといった感じだろうか。せっかくの広い空間を年一度の運動会のために園庭を自然からほど遠いものにしておくのはどうだろうか。運動会は、他に場所を移して行う

こともできる。それよりも、毎日の生活の中でもっと身近に自然に触れる機会をつくるのが、子どもたちにとって意味のあることではないだろうか。特に、都市部の幼稚園・保育所であればあるほど、緑あふれる園庭にすべきではないだろうか。園庭に木々を植え、野の花や四季の花を植え、魚が泳ぐ小さな池があるなど、子どもたちの身近に感じられる自然豊かな園庭にするという発想の転換が必要であり、自然に包まれた子どもたちの生活を確保することが求められている。

また、倉橋惣三は「『広い自由な遊び場と新鮮な空気と十分な日光』が、子どもたちにとっての宝である」とも言っている。私たち大人は、子どもたちからその宝を奪ってしまっているのではないだろうか。地球温暖化など自然界から様々な警鐘が鳴らされている。大人がつくり出した問題は、大人たちで解決しなければならないのにこのままでは、問題だらけの世界を次の世代の子どもたちに残すことになってしまう。これらの問題を私たち大人が解決することを第一に考えることはもちろんだが、それと同時に子どもたちに将来の備えを用意する必要性をもう一度私たちが考えることが大切である。

幼児期に自然に触れ遊んだという「原体験」があつてこそ、自然の大切さと自然とともに生きるこの意味を子どもたちが、大人になったときに理解できることにつながっていく。

幼稚園・保育所は、毎日、保護者や地域の方々といった大人が出入りし、地域において幼児から大人まで環境について意識を高めることのできる有効な場所である。これからの幼稚園・保育所の経営や運営においては、環境に配慮した幼稚園・保育所づくりは、欠かせないものであるということ意識したい。

## 第5章

### 環境学習・教育に取り組むために

#### ～ 幼稚園教諭・保育士に求められる力～

#### 1 保育者の感性を高める

自然の美しさや不思議さに心動かし、ワクワクする感性、幼児の感動に共感できる感性など、保育者の感性を高めていくことは、不可欠なことである。保育者自身が自然に興味をもち、五感を通して自然と触れ合うことに心地よさを感じ、楽しんでいる姿を子どもたちに見せていくことが大切である。

ある新規採用教員研修会でのことである。

「五感を通して自然を感じよう」というプログラムの中で、自然の中で木肌に触れたり、木々や海の匂いを感じたり、虫や鳥の鳴き声、風の音に耳を傾けたりなどした。参加者からは「こうした体験は初めてです」という声が多く聞かれた。保育者自身が、五感を通して自然に触れる経験が少なくなっている現状がうかがえる。今後、意識してこのような機会を多くもつことが必要である。

その一つの方法として管理職は、保育者が自然教育・環境学習・教育の体験型研修等に参加することを勧めるのもよい。また、地域の人材を保育に生かし、直接教えてもらったり、かかわる機会をつくったりしていく。幼児にとっても地域の方との交流は意義があるので、地域の人材は大いに活用していきたい。

いろいろな機会をとらえて保育者自身が、感性を高める努力をすることは言うまでもないことである。

#### 2 保育者が「気付く眼」をもつ

幼稚園・保育所では、自然体験や生活体験を通

して、幼児期から「生命の大切さ」や「資源の大切さ」、「環境の変化に気付く力」を育てることを大切にしている。

「幼児期における環境学習・教育」について、ある園で、職員に尋ねてみたところ、「生命の大切さに気付く」、「水や物を大切にする」、「自然の美しさや不思議さに気付く」、「ごみを分別する」、「落ち葉を腐葉土にする」、「空き容器を使って物を作る」などと答え、環境学習・教育の要素が、日々の幼児の遊びや生活の中にあるということに気付いている職員もいる。また、保育者自身が自然の変化などになかなか気付けないので、子どもたちも気付かないまま通り過ぎているのではないかと感じている職員もいる。

保育者は、子どもたちが登園するに当たり、園舎内外の掃除や砂場の整備、遊具等の安全点検をする。そして、それぞれの学年や学級、個人の育ってほしい姿をイメージしながら環境をつくっていく。年齢や発達、季節に合わせた虫や生き物、用具や遊具などが、子どもたちの登園を待ち受けている。こうして、子どもたちは、様々な身近な環境にかかわり、遊びに夢中になればなるほど、「なぜだろう」、「不思議だな」などと、心を動かし始める。

夏の暑い日、運動遊びの後、4歳児の保育者が「園の中で涼しい場所を見つけて一休みしましょう」という言葉掛けをしたところ、子どもたちは木陰や石のトンネル等、様々な場所を発見する。園庭にある大きな樹の下に集まってきた子どもたちは、「涼しいね」、「どうして涼しいの?」と樹を

---

見上げながら、青々と茂った葉っぱや、長く伸びている枝等に気付いている。

また、秋には、色付いた葉っぱを集めて、リス小屋に入れたり、ままごとに使ったりなどしている。冬には、園庭いっぱいには落ちていた小枝を集めて、造形遊びを楽しむ姿も見られる。子どもたちにとって、大きな樹の下は、四季折々の自然が楽しめる憩いの場所でもある。

ところが、様々な物が園庭や保育室にあるのに、それが子どもたちの遊びに生かされないこともある。これは、子どもたちの活動と環境が繋がっていないのである。その環境に気付いていない子どもたちには、気付くような言葉を掛ける。また、直接言葉を掛けなくても、保育者が関心を示すことで子どもたちが気付くこともある。このように、保育者の援助により、子どもたちがその環境に心を動かしていくことは、日常の保育の中ではよくあることである。子どもたちの周りの環境は、子どもたちが心を動かすことで、子どもたちにとって身近な環境になっていく。環境と子どもたちをつなぐ媒介者としての保育者の役割は重要である。

何よりも、保育者が園内外の様々な環境の変化に対して、「気付く眼」をもつことである。「いつものこと、毎年のこと」、「身の回りにはある環境は当たり前」という視点から、こだわりをもって園内外の環境を「環境学習・教育」の観点で見直していく。例えば、園内外の四季折々に出会える園庭マップ等を作成することから、園の全職員の意識を高めていくのも一つの方法である。

### 3 「環境学習・教育」を幼稚園・保育所の重点目標や指導計画に位置付ける

幼稚園・保育所では、自然体験や生活体験を通して、以下の内容を意識して取り組んでいる。

- ・生命の大切さや不思議さに気付く
- ・自然の大きさ、美しさ、不思議さなどに気付

く

- ・地域の中の自然やそれにかかわる人々に親しみをもつ
- ・生活の中で環境やその変化に気付く
- ・資源を大切にしようとする

そこで、園の実態に応じて、園としての「環境学習・教育」のねらいやテーマを全職員で話し合い、指導計画に位置付けていくことが必要である。

例えば、テーマとしては、「地域をテーマにした環境教育」、「近隣の公園を活用した環境教育」、「栽培活動を通じた環境教育」等、年間を通して、地域に出掛けたり、四季折々の自然に触れたりする内容等が考えられる。園庭であれば、毎日、園庭に出て遊び込める時間をつくる。また、風や光、雲の変化、雨の様子、木々や草花の変化、虫や飼育動物など同じ場所で、様々な変化に、繰り返し出会い、気付く、経験する機会をつくっていくことも大切である。このように、保育者が日常的に継続的に自然にかかわることを意識して取り組むことによって、子どもたちの自然への関心も高まっていく。

また、年間を通して地域に出掛けることで、自分たちが住んでいる地域の素晴らしさや良さを感じたり、人間関係を広げたりしていくこともできる。「環境学習・教育」は、幼稚園・保育所の中だけで完結するものではない。園全体の取組が家庭・地域へと広がっていくこと、幼稚園・保育所における「環境学習・教育」の取組を家庭や地域に啓発していくことが大切である。

このように、「環境学習・教育」の観点を意識して指導計画に明確に位置付け、幼稚園・保育所の活動全体を通じて実施する体制を構築していくことが必要である。

子どもたちの世界は、いつも生き生きとして新鮮で美しく、驚きと感激にみちあふれています。残念なことに、わたしたちの多くは大人になる前に澄みきった洞察力や、美しいもの、畏敬すべきものへの直感力をにぶらせ、あるときはまったく失ってしまいます。

もしもわたしが、すべての子どもたちの成長を見守る善良な妖精に話しかける力をもっているとしたら、世界中の子どもに、生涯消えることのない「センス・オブ・ワンダー＝神秘さや不思議さに目をみはる感性」を授けてほしいとたのむでしょう。

この感性は、やがて大人になるとやってくる思慮と幻滅、わたしたちが自然という力の源泉から遠ざかること、つまりない人工的なものに夢中になることなどに対する、かわらぬ解毒剤になるのです。

妖精の力にたよらないで、生まれつきそなわっている子どもの「センス・オブ・ワンダー」をいつも新鮮にたもちつづけるためには、わたしたちが住んでいる世界のよるこび、感激、神秘などを子どもといっしょに再発見し、感動を分かち合ってくれる大人が、すくなくともひとり、そばにいる必要があります。

多くの親は、熱心で繊細な子どもの好奇心にふれるたびに、さまざまな生きものたちが住む複雑な自然界について自分がなにも知らないことに気がつき、しばしば、どうしてよいかわからなくなります。そして、

「自分の子どもに自然のことを教えるなんて、どうしたらできるというのでしょうか。わたしは、そこにいる鳥の名前すら知らないのに！」と嘆きの声をあげるのです。

わたしは、子どもにとっても、どのようにして子どもを教育すべきか頭をなやませている親にとっても、「知る」ことは「感じる」ことの半分も重要ではないと固く信じています。

子どもたちがである事実のひとつひとつが、やがて知識や知恵を生み出す種子だとしたら、さまざまな情報やゆたかな感受性は、この種子をはぐくむ肥沃な土壌です。幼い子ども時代は、この土壌を耕すときです。

美しいものを美しいと感じる感覚、新しいものや未知なものにふれたときの感激、思いやり、憐れみ、賛嘆や愛情などのさまざまな形の感情がひとたびよびさまされると、次はその対象となるものについてもっとよく知りたいと思うようになります。そのようにして見つけた知識は、しっかりと身につきます。

消化する能力がまだそなわっていない子どもに、事実をうのみにさせるよりも、むしろ子どもが知りたがるような道を切りひらいてやることのほうがどんなにたいせつであるかわかりません。

もし、あなた自身は自然への知識をほんのすこししかもっていないと感じていたとしても、親として、たくさんの方のことを子どもにしてやることができます。

たとえば、子どもといっしょに空を見あげてみましょう。そこには夜明けや黄昏の美しさがあり、流れる雲、夜空にまたたく星があります。

子どもといっしょに風の音をきくこともできます。それが森を吹き渡るごうごうという声であるうと、家のひさしや、アパートの角でヒューヒューという風のコーラスであるうと。そうした音に耳をかたむけているうちに、あなたの心は不思議に解き放たれていくでしょう。

雨の日には外にでて、雨に顔を打たせながら、海から空、そして地上へと姿をかえていくひとしずくの木の長い旅路に思いをめぐらせることもできるでしょう。

あなたが都会でくらしているとしても、公園やゴルフ場などで、あの不思議な鳥の渡りを見て、季節の移ろいを感じることもできるのです。

さらに、台所の窓辺の小さな植木鉢にまかれた一粒の種子さえも、芽をだし成長していく植物の神秘について、子どもといっしょにじっくり考える機会をあえてくれるでしょう。

レイチェル・カーソン（上通恵子・訳）  
『センス・オブ・ワンダー』新潮社、1996 より抜粋



## 第2部

### 効果的な環境学習・教育を進める具体的手法

## 第1章

# 幼稚園・保育所で環境学習・教育を進めるための考え方

ここでは、幼稚園・保育所で環境学習・教育の取組を進める際に、特に考慮しておきたい事柄を環境問題と教育の観点から述べるとともに、具体化（何を、どうやる）のための二つのアプローチについて説明します。

## 具体化（何を、どうやる）に際しての大切な二つの視点

### 1 自然の直接体験や学習を基本に据えましょう

大気汚染、水質汚濁、森林破壊、ごみ問題など、様々な現象として現れている環境問題の本質とは何でしょうか。環境問題は、その本質を踏まえてエコロジカル・カタストロフィー（生態的破局）と言われています。本来、人間も含めてすべての自然の命は、多様な自然のモノや生命が織りなすつながり（生態系）の中で生かされています。しかし、そのつながりが私たち人間の自然に対する無関心、無理解、無責任な行為によって切られ、結果的に起こっているのが環境問題です。つまり、その原因は、私たち人間と自然とのかかわり方にあるということです。その意味では、環境学習・教育を進める際に、自然の仕組み、人間にとってのそのことの意味を感覚的・知的（生態学的）に深く理解する体験や学習を基本に据えることが重要と言えます。まさに、文部省（当時）『環境教育指導資料』の幼稚園教育の基本に示される「自然などの身近な事象への興味・関心を育て、それに対する豊かな心情や思考力の芽生えを培うようにする」を基本にしようということです。

### 2 意図的・系統的アプローチを心掛けましょう

環境学習・教育は深刻さを増す環境問題の解決に教育的な立場から応えていこうという試みです。その目的は、平たく言えば、「環境に配慮した暮らしが実践できる人を育てる、そうした暮らしが当たり前の社会をつくる」ということでしょう。その進め方（どうやるか）は、環境教育の必要性が叫ばれ始めた当初から、いわゆる系統立ったカリキュラムやプログラムを用いず、どちらかと言えば、様々な教科や場面で多様なテーマや手法で行う学際的アプローチが主流です。しかし、教育（保育）は、ねらい・目標・目的を達成する手段と言われています。その意味では、自然を深く理解し、そのことを、環境に配慮した暮らしにつなげていくために意図的・系統的に体験や学習をデザインし、提供していくことが重要だと言えます。

## 具体化（何を、どうやる）のための二つのアプローチ

### 1 生活習慣ベース

環境学習・教育の目的は、環境に配慮した暮らしが実践できる人の育成（＝環境に配慮した行動化・習慣化）を目指すものです。幼稚園・保育所の目標の一つは、健全で安全で幸福な生活のための習慣を養うことです。その意味では、日々の園の生活の中で環境に配慮した生活を積み重ねる中で、習慣化を図り、その大切さを理解してもらう試みです。

### 2 体験・学習ベース

園で実際に行っている様々な活動や行事を環境学習・教育の観点で見直したり、環境に関連する年間の催事や記念日、全国的に実施されているキャンペーンなどを新たな活動や行事として採り入れたりして、子どもの発達段階を考慮したうえで、意図的・系統的な体験や学習として提供しようとする試みです。



● 園生活の場面：

登園・降園

具体的な展開イメージ/アイデア

1. エコロジーのムダ使い  
大気汚染防止

・前提として：  
 紙などの園は環境に配慮した  
 園づくりに目指しています！  
 紙を減らす打ち出し

- 自転車乗降園の場合

- ・アイドリングストップを呼びかけ
- エコドライブ
- 自転車
- 園外

- バスで送迎の場合

- ・乗降乗降の場合、上りの新機を持つて協力要請
- ・降園利用のバスを使用

- ・環境学習アイディア/グッズの興味を高める
- ・教材には、絵本
- ・ロールプレイ
- ・ペープサート
- ・パネルマター

● 環境学習として取り組める要素：

1. エコロジーのムダ使い
2. 自然に向き合う

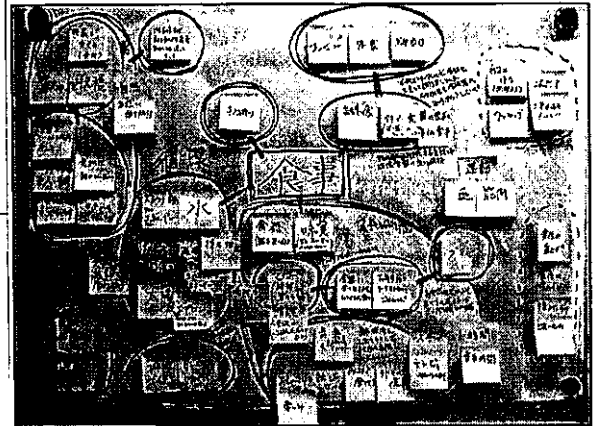
2. 自然に向き合う

- ・登園園庭に足さず動物、花など

(例)

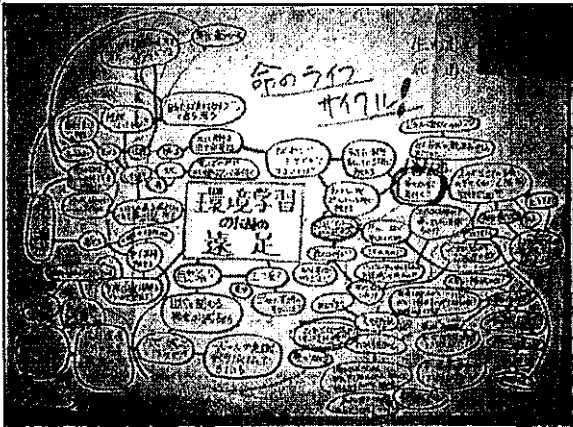
動物の種類	観察回数
お花	〇〇〇〇
お虫	〇〇
お鳥	〇〇〇〇
お魚	〇〇〇〇

- ・見つけると見前に示して、記録簿等に色を付けさせる
- ・見つけたら、つらつら(紙)に貼らせておこう



↑ 写真1

↑ 図1



↑ 写真2

● 環境学習として取り組める要素：

環境学習の視点を取り入れて...

- ・子どもの笑顔を促すための手立てを講じる
- ・子どもが興味を持って取り組めるように工夫する
- ・自然の観察や発見を促す
- ・自然の観察や発見を促す
- ・自然の観察や発見を促す

具体的に...

- ・「みつけシート」を作成
- ・見つけた動物や植物を記録簿に記入
- ・見つけた動物や植物を記録簿に記入
- ・見つけた動物や植物を記録簿に記入

☆親子満足☆

- ・大勢で遊ぶ(楽しい)
- ・おしゃべりして
- ・家で食べたおいしいおやつ
- ・おやつを食べておいしいおやつ
- ・おやつを食べておいしいおやつ
- ・おやつを食べておいしいおやつ

このまちだいすき♡

子ども、大人も、花も、動物も、みんな元気に暮らそう！

大切な命、大切にしたい

↑ 図2

写真・ワークシートはどれも、環境学習リーダー研修(平成19年度)で受講者が作成したものです。グループごとに園生活の1日の行動や1年の活動・行事を書き出したうえで、環境学習・教育として取り組む項目を選択し、ラベルワーク(写真1/手法については17ページ参照)やマッピング(写真2/手法については17ページ参照)で具体的なアイデアを出しました。

図1は、生活習慣ベースの具体化として登園・降園を取り上げ、図2は、体験・学習ベースの具体化として、遠足を取り上げ、それぞれまとめたものです。

## 第2章

# 幼稚園・保育所で環境学習・教育を具体化する方法

具体化(何を、どうやる)のための二つのアプローチについて、それぞれの手順を見ていきましょう。

### 生活習慣ベース：ECO(エコ)幼稚園・保育所づくり

1日・1か月・1か年と幼稚園・保育所での時間の流れをとらえた時、日々の生活そのものの多くが、環境学習・教育と直結していることに気付かされます。例えば、登・降園時の通園バス。昇降時はアイドリングストップを徹底し、月に1日「ノーマイカーデー」を設けて、道すがらの自然探索を含めた登園の推奨など視点を少し“環境”にシフトさせ工夫するだけで、今ある幼稚園・保育所での日常を、環境に配慮した暮らし(=ECO幼稚園・保育所)に変えることができるのです。

この章では、職員会議や研修会など複数人で具体化を模索する場合の手順について説明していきます。

### 具体化の手順(3-Step)

#### 1 現状を整理する

登園から降園までの1日の行動を時間軸で書き出します。(下図STEP1参照/ここではロジックツリーという手法を紹介しています。)

そのうえで、環境学習・教育として取り組むことのできそうな観点を関連付けて細分化・図式化させます。

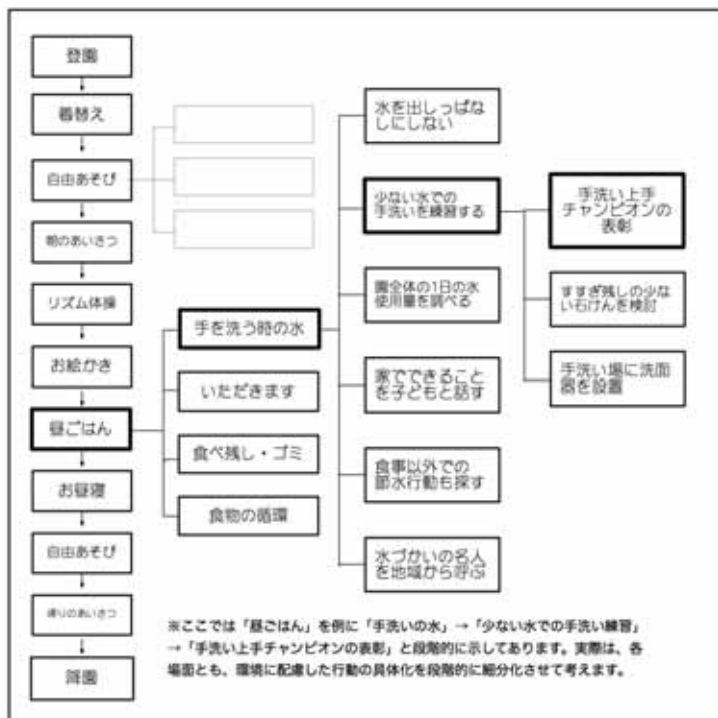
#### 2 具体的なアイデアを出す

必要なこと(Needs)+やりたいこと(Want)+できること(Can)の3観点で、具体化のアイデアを広げます。(次頁図STEP2参照/ここではラベルワーク、マッピング、マンダラチャートの3つの手法を紹介しています。会議の時間や人数、構成メンバー等により、適当な方法を選択してください。)

#### 3 実施要項にまとめる

「やれたらいいね」、「いつかやりましょう」では絵に描いた餅に。具体的に展開するにあたっては、アクションシート(活動計画)のような形にし、かわる人たちで共有しましょう(右頁図STEP3参照)

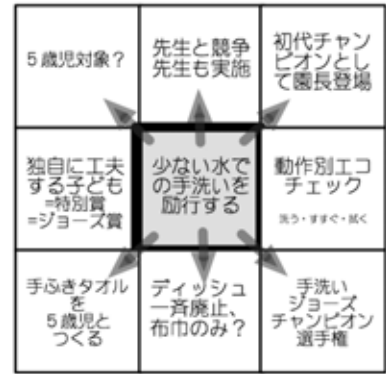
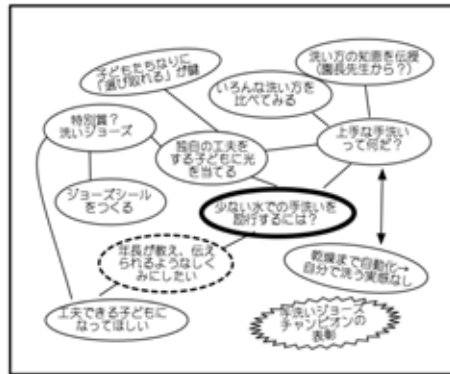
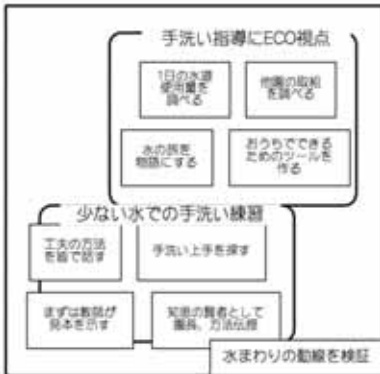
### STEP1 現状を整理する：時間軸で細分化・図式化/ロジックツリー



### ECO視点で考える際の動詞10キーワード

1. へらす  
・・・ゴミを/モノを/物を
2. ふやす  
・・・酸素を(緑を)/エコマインドを
3. つかう  
・・・長く/もう一度/代々
4. つくる  
・・・買わずに/材料から
5. なおす  
・・・替わずに/買わずに
6. えらぶ  
・・・エコ商品を/自然素材を
7. すてる  
・・・分別して/考えてから
8. ゆずる  
・・・人に/譲られたモノをまた
9. やめる  
・・・使い捨てを/送ったら
10. きめる  
・・・実行することを/やめることを

## STEP2 具体的なアイデアを出す：拡散&関連づけ/ラベルワーク・マッピング・マンダラート



### 【思考を分類・再構築：ラベルワーク】

ラベルワークは、**アイデアをカード化**（7.5 cm角程度の付箋紙が最適）することにより、**分類・整理・再構築を行う手法**です。

まずは、思いつくアイデアをカードに書きます。この際、必ずカード1枚につき1アイデアのみを記述します。また、「節水」、「もったいない精神」などといった単語ではなく、「5歳児の洗い上手を探す」、「習得した方法を年少さんに教えに行く」などといった文章（1センテンス）で書くことがポイントです。このルールを守ることにより、抽象的でなく具体的な観点がカード化されるため、曖昧な分類を避けることができます。

### 【頭の中をそのまま外に：マッピング】

マッピングは、その名の通り“頭（思考）の地図”。**大きめの紙**（複数人で行う際は模造紙等）を横にして、**中心にテーマを書き、そのテーマに連なるアイデア・問題意識・現状・情報など枝を伸ばすように、マーカーでどんどん書いていきます。**

ポイントは、きれいに書こうとしないこと。関連する事柄は思考するスピードのままに手を動かすことで、混乱している要素が整理され、事象の背景にある課題がクリアになってきます。職員会議など複数人で行う時は、思いついたことを各々が書き留めるのではなく、会議の内容をすべて1枚の紙に書き残すこと（会議プロセスの見える化）により、話し合ったことを共有しやすく、また感情的な議論を避けることができます。

### 【1人でもできる発想法：マンダラート】

マンダラートは、**9つのセルに区切った正方形の中央にテーマを、周辺の8つのセルに答え**（思いつき・懸念事項など）を埋めていく**発想ツール**です。

連想ゲーム風に、様々な観点からアイデアを出すことで、多面的な検討が可能。8つのセルが埋まったら、その1つをさらに中心テーマに置き直し、第2ラウンドスタート。「食事の前、手洗いを通じて子どもたちと水の大切さを考える」ための具体案として「手洗い上手チャンピオン選手権」、「箱ティッシュ廃止、手ふきタオルを5歳児とつくる」などが出てきました。

## STEP3 実施要項にまとめる：収束&共有/アクションシート

**タイトル： 手洗いジョーズ選手権2008**

**ねらい：** 少ない水での手洗いを習慣化するため「手洗いジョーズ選手権」と銘打ち、子どもたちの水への関心・意識を高めるとともに、水の大切さ・有限性について学び機会を提供する。

●WHEN (いつ)	2008年6月(環境月間)
●WHO (だれが)	4歳児・5歳児担当教諭
●WHERE (どこで)	帰りの会にて日々賞賛 月末に選手権の実施
●WHAT (何を)	日々：ジョーズシールの贈呈 月末：ジョーズ選手権の実施
●WHY (なぜ)	大半の子どもたちは「水を出しっぱなしにしない」が習慣化していない。また、なぜ大切なのか、水の脈（つながり）に対する理解は乏しい。「選手権」というわかりやすさは、習慣化・意識化を促し、園全体での行動促進の入り口に適しているため。
●WHOM (誰に)	4歳児・5歳児
●HOW (どのように)	

1日をふりがえり、工夫・意識していた子どもにジョーズシール贈呈する。1週間ごとにシール数をカウント、最終週には4歳児・5歳児・先生による選手権を行い「イチバンジョーズ」を決める。

### アクションシートの作成

何をどのように行うかという骨格が見えたら、左図のようなアクションシート（**6W1Hを記載した活動計画**）を作成しましょう。こうして文章化することは、計画内容が明確になるとともに、かかわる人たちの共通言語づくりになります。

アクションシートが完成したら、あとは実施するのみです。とはいえ、よほど意識しなければWHAT（何を）+ HOW（どのように）は、できること（いつもやっていること・簡単なこと）に収まりがちです。言い換えると、**WHAT + HOWが魅力的な活動にする鍵を握っている**のです。

アクションシートを記入したら、第三者の意見を聞いてみましょう。「面白そう」、「素敵」といった反応が返ってこない時こそチャンスです。活動を魅力的にするアイデアが眠っているかも知れません。

### 【活動計画アイデアあれこれ】

- ・シールを貼る
- ・スタンプを集める
- ・手帳（コレクション）
- ・表彰・メダル
- ・絵本にする
- ・発表する

・・・etc.

## - 1 体験・学習ベース：環境学習・教育を意図して既存の活動・行事を見直し、再構成する

すでに園で実施されている活動や行事を環境学習・教育の観点で見直すことは、今すぐ始められることであり、いつでも試行できることです。「恒例行事だから」「例年 へ行っているから」といった、すでに固定化（定着化）している活動や行事を異なる観点から見直してみると、新たな展開や可能性が見つかるかもしれません。では園での1日の生活を取り上げてみましたが、ここでは4月（入園）から3月（卒園）の1か年を環境の観点で紐解きます。

### 具体化の手順（3-Step）

#### 1 可能性を洗い出す

4月から3月までの活動・行事を**時間軸で書き出します**。その際、環境学習・教育として取り組むことのできそうな観点を関連付けて整理してみると良いでしょう。（下図STEP1参照）

#### 2 具体的なアイデアを出す

必要なこと(Needs) + やりたいこと(Want) + できること(Can)の**3観点**で、具体化のアイデアを広げます。（右頁図STEP2参照 / ここではTチャートという手法を紹介しています。で紹介したラベルワーク等を用いることも可能です。）

#### 3 指導案にまとめる

明らかにした「ねらい」を達成するために、意図的・系統的なものとして指導案にまとめます。ここでは、平成19年度環境学習リーダー研修で作成したシートを紹介しています。

### STEP 1 既存の活動・行事を環境教育・環境学習の視点で見直し可能性を洗い出す：時間軸で対応表

季節	主な行事	環境学習・教育として取り組む時のアイデア
春	入園式 子どもの日 春の遠足 参観日	園庭定点撮影スタート：四季の変化を撮りため、卒園式等にスライド上映すると素敵ですね。 柏餅を素材に：新芽が出るまで古い芽が残る特徴のカシワ。作る、食べるに加えて1メッセージ。 集める・つなげる：葉や花びらで遊ぶ際に、命のバトンをつなぐ役とのメッセージを託すとじんわり。 <b>&lt;春は、新芽・新緑など木々や草花を素材に“成長・生命”を学ぶのに適した季節です。&gt;</b>
夏	七夕 プール開き お泊まり会 盆踊り	朝露：願い事は朝露を集めてすった墨で書くと叶うと言われています。早朝登園でキラッと光る宝探し。 水の旅：水を多く使う季節。雲・雨・川・海・・・と地球上を回る水の経路を実感するチャンスです。 始まり・終わり：朝日、夕日、月の出を見るなど、特別な日にこそ貴重な瞬間を共有したいですね。 <b>&lt;夏は、水・太陽・エネルギーなど地球をめぐる“循環”を学ぶのに適した季節です。&gt;</b>
秋	運動会 収穫感謝 秋の遠足 餅つき	家族・地域：直接環境学習とは結び付きにくい行事ですが、保護者、地域の方など来園者の多い機会としては、“子どもたち自身が環境行動を発信する場”として適しているかも知れません。  (右頁参照)
冬	クリスマス会 生活発表会 節分 ひなまつり お別れ会	・ ・ ・  以下、園の行事に照らし合わせながら、環境学習・教育として取り組むことができそうな観点を整理してみましょう。

**STEP2**

具体的なアイデアを出す：拡散&関連づけ/Tチャート（これまで・これから）

・・・秋の遠足を例に、Tチャートでアイデアを出してみます。

	これまで	これから
活動名	秋の親子遠足	おやこえんそく・秋の5,000歩
ねらい	親子でドングリや落ち葉に触れることを通じて、身近な自然で遊ぶことを楽しむ。	移動手段は車が主流の親子に対し、「歩く」、「探す」、「宝物」をコンセプトに地域の自然と出会う機会を親子でもつ。
対象	4・5歳児とその保護者	4・5歳児とその保護者（同左）
実施時期	10月上旬 お弁当持参で1日	10月上旬 お弁当持参で1日（同左） ただし、地域の協力者による“芝生で野点”（野草茶+和菓子）有り
フィールド	〇〇公園（例年実施、適度な自然環境で且つ、中央が芝生のため安全性が高い）	〇〇公園（同左）ただし、現地解散を基本とする。
交通手段	園バス（複数台）にて往復移動	居住地ごとの小グループに安全確保の教師・協力者を配置、現地までは“親子”を基本に徒歩移動（緊急時ピックアップ車の確保有り）
展開	〇〇公園に着いたら、自由に遊ぶ。子どもたちはドングリ拾いに夢中になる。保護者には安全確認をお願いしているが、芝生での談笑が中心で、自然遊びには加わってもらえていない。なお、拾ったドングリは持ち帰って工作に使っている。	親子で“道草”が一番の目的。道草グッズ（万歩計・探すモノが書かれた指令書・探したモノを入れる宝箱・謎の地図）を渡し、親子のペースで5,000歩を歩く実地版RPG。目的地（公園）では、協力者による野点があり、宝物をおすそわけ（=体験の共有化）することにより、別の楽しみを享受することができる。また、事後学習として、協力者を園へ招待し“子ども野点”を行うことで地域連携を図る。

※ Tチャートとは、現状と理想・過去と現在など対照する二つの項目を比較検討する際に適した手法です。  
1つの活動・行事を別の側面、反対の側面から見てみることで思考の幅を広げることができます。  
STEP1で、アイデアや計画が絞られてきた段階で使います。意思決定にかかわる人たちに、Tチャートの情報を示すと客観的に比較がしやすいため、意思決定の参考にしてもらうことができます。

**STEP3**

指導案にまとめる：収束&共有/企画シート（指導案）作成

活動/行事： 森のミッション大作戦

<p>目標</p> <p>親子で自然に触れ合う</p>	<p>実施要項</p>
-----------------------------	-------------

時間	ねらい	活動名	概要
	〇〇公園に到着後	<ul style="list-style-type: none"> <li>① 森のミッションカードを配布し、親子で一緒に読む。</li> <li>② 森のミッションカードを配布し、親子で一緒に読む。</li> <li>③ 森のミッションカードを配布し、親子で一緒に読む。</li> <li>④ 森のミッションカードを配布し、親子で一緒に読む。</li> <li>⑤ 森のミッションカードを配布し、親子で一緒に読む。</li> <li>⑥ 森のミッションカードを配布し、親子で一緒に読む。</li> <li>⑦ 森のミッションカードを配布し、親子で一緒に読む。</li> <li>⑧ 森のミッションカードを配布し、親子で一緒に読む。</li> <li>⑨ 森のミッションカードを配布し、親子で一緒に読む。</li> <li>⑩ 森のミッションカードを配布し、親子で一緒に読む。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>① 森のミッションカードを配布し、親子で一緒に読む。</li> <li>② 森のミッションカードを配布し、親子で一緒に読む。</li> <li>③ 森のミッションカードを配布し、親子で一緒に読む。</li> <li>④ 森のミッションカードを配布し、親子で一緒に読む。</li> <li>⑤ 森のミッションカードを配布し、親子で一緒に読む。</li> <li>⑥ 森のミッションカードを配布し、親子で一緒に読む。</li> <li>⑦ 森のミッションカードを配布し、親子で一緒に読む。</li> <li>⑧ 森のミッションカードを配布し、親子で一緒に読む。</li> <li>⑨ 森のミッションカードを配布し、親子で一緒に読む。</li> <li>⑩ 森のミッションカードを配布し、親子で一緒に読む。</li> </ul>

チーム名 \_\_\_\_\_ メンバー名 \_\_\_\_\_ 日付 \_\_\_\_\_

活動/行事： 命の大切さを知ろう

<p>目標</p> <p>命の大切さを知り、自然への思いを育む。</p>	<p>実施要項</p>
--------------------------------------	-------------

時間	ねらい	活動名	概要
朝	命の大切さを知り、自然への思いを育む。	命の大切さを知ろう	命の大切さを知り、自然への思いを育む。
昼	命の大切さを知り、自然への思いを育む。	命の大切さを知ろう	命の大切さを知り、自然への思いを育む。
夜	命の大切さを知り、自然への思いを育む。	命の大切さを知ろう	命の大切さを知り、自然への思いを育む。

チーム名 \_\_\_\_\_ メンバー名 \_\_\_\_\_ 日付 \_\_\_\_\_

15ページの図1・2同様に、環境学習リーダー研修（平成19年度）で受講者が作成したものです。

STEP2のTチャートでも比較しているように、既存の遠足を、意図的・系統的な環境学習・教育の機会としてとらえるには、何を主眼にどのような展開が適しているかと話し合いました。

## - 2 体験・学習ベース：環境学習・教育を意図して新規の活動・行事を導入する

では生活習慣ベース、 - 1 では既存の活動・行事の見直しと、いずれも今の園生活を環境学習・教育の観点で見直す方法を提示してきました。これらの方法は、既に枠組みがあるため時間的・空間的な見通しが立てやすいという特徴もありますが、慎重に吟味しなければ一つの活動で複数のねらいがあるような、焦点化されない活動を乱立させる危険性もあります。その意味では、既存の枠組みに縛られず、環境学習・教育に焦点化した活動・行事を導入すると良いでしょう。

とはいえ、意図的・系統的な環境学習プログラムを完成させることは一朝一夕にはできません。そこで、環境に関する社会全体の“旬”、“時流”をヒントに、園独自のアレンジを加え、効率的・効果的な環境学習・教育に仕立ててみるのがオススメです。

ここでは、環境に関連したイベントを例に、園で取り組む場合の展開案を紹介します。

### 具体化の手順 (3-Step)

#### 1 テーマを探す

環境に関連するイベント・歳時記の例を挙げています。(下図参照) このほか、地域の祭りや風習、歴史などからヒントを得て、新たな試みに適した場面・テーマを探しましょう。

#### 2 意図的・系統的な教育・学習場面としてアレンジする

時代の流れは、“参画”(良い意味での便乗)です。いかに子どもたち自身が当事者になれるか、周りの大人たちが興味・関心をもって参加できるか、面的な広がり(うねり)として魅せることができるか考えてみましょう。

#### 3 指導致案にまとめる

まとめる際は余白(遊び)を残すことがポイントです。細部まで作り込むとイレギュラーに対応できません。魅力的な活動にするヒントも参照してください。



### 旬のイベント紹介

#### 打ち水大作戦

決められた時間にみんなでいっせいに水をまくことで、伝統的な「打ち水」の効果を科学的に検証しようとする、前代未聞の社会実験です。(打ち水大作戦・WEBサイトより転記)

大暑(暑さが最も厳しい時期)から処暑(暑さがやむ、の意味で涼風が感じられる時期)の1ヶ月(2007年は7月23日~8月23日)残り湯などの二次利用水をつかった打ち水を行う一斉活動です。2002年からスタートし、全国各地(世界でも!)賛同する人・組織・企業が「この指とまれ」方式で増え続けている魅力的な活動です。WEBサイト(<http://www.uchimizu.jp>)も充実し、「私たち、賛同します!」の登録により、打ち水日記がアップできるほか、チラシ作成のためのロゴやバナーなど、自由に使えるツールが多彩に準備されていて、うねりをつくる・盛り上げる遊び心も満載です。

## 打ち水大作戦〇〇園の巻

最近、「打ち水」が流行っているみたいですが、うちの園でも取り組みませんか？

そんなA先生の提案によって、動き出した「〇園打ち水大作戦」。打ち水をする—それだけのコトだからこそ、魅力的な環境イベントにできないだろうかと思いを絞ってみました。

「まずは格好から入りましょうよ」とB先生。浴衣姿で柄杓片手に涼を打つ江戸時代にならって、子どもたちが浴衣で集まる、盆踊りの日を「〇園打ち水スペシャルDAY」とすることに。「1日だけでなく、何日かしませんか？」とC先生。「それなら、「手洗いジョーズ選手権（17ページ参照）」と連動させましょう」とA先生。A・B・C先生は、早速企画を練り始めました。

1. 〇園では、平成20年の環境月間（6月）を少ない水での手洗いを習慣化させるため、「手洗いジョーズ選手権」を行う。
2. プール開きをし、水に頻繁に触れる7月を「打ち水月間」として、プール・雨水等の二次利用水の還元を定着化させる。
3. 8月10日の盆踊りに「江戸の暮らし」要素を加える。

具体的には①浴衣で打ち水②金魚売り・氷屋さんの登場③蚊帳コーナーの設置により、涼を楽しむ機会を提供し、クーラーに依存しがちな生活習慣からの移行を図る。

と、骨子が決まったようです。そもそも、世界の水事情はどうなっているのだろうか？うちの園では1日にどのくらいの生活排水を流しているのだろうか？子どもたちは、水についてどんな感性・意識をもっているのだろうか・・・調べることに、考えることはたくさん出てきます。



## 旬のイベント紹介

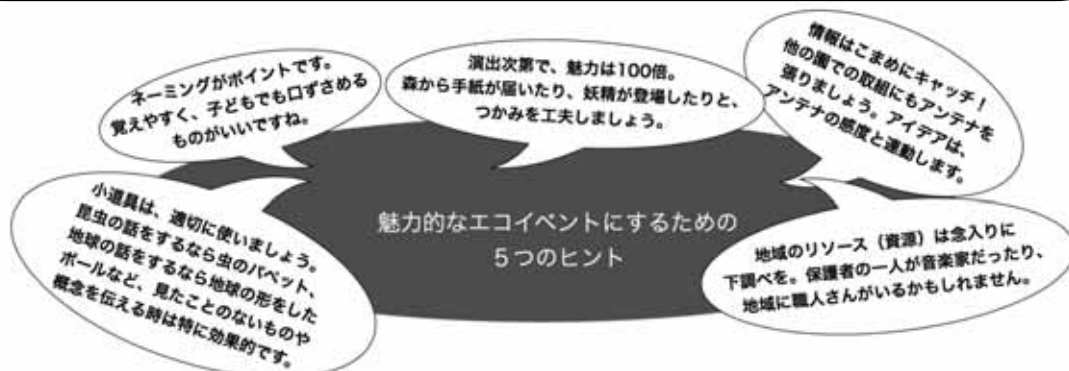
### ごみ拾い

なぜ大人が捨てた物を・・・子どもに大人の尻ぬぐいをさせるなんて！というマイナスイメージもありますが、このごみ拾いを「かっこよくて」、「おしゃれで」、「楽しい」活動にする取組が、近年日本各地で行われています。なかには、「ごみ置き場をアートにするプロジェクト」と名付け、赤の花（可燃ごみ）・青の魚（不燃ごみ）・緑の木（資源ゴミ）のイラストが入ったごみ袋を作製しているデザイン会社もあります。

同じ絵のごみ袋を積み上げれば、ごみ置き場がお花畑や海原、森のように見えることにプロジェクト名は由来しているようです。

確かに、ごみ袋を片手に園の周辺を歩くと、ペットボトルやたばこの吸い殻、空き缶などがあつという間に集まってしまう現実があります。とはいえ「拾うこと」に終始するのではなく、ごみとは何かを考えてみたり、物を大切にするためのルール決めをしたりと、ごみ拾いを糸口に、意図的・系統的な活動の機会として発展させるための要素を多分に含んでいます。

また先に挙げたプロジェクトにヒントを得て、園の周りの自然やまちの探検を兼ねてごみ拾いを行うのが良いでしょう。その際、子どもたち自身が絵を描いたごみ袋を持っていくことをオススメします。自筆の絵が描かれた袋を持って、まち中探検です。思わずワクワクしてしまう活動になること間違いなしです。また、思わず地域の人が声を掛けたくなる活動になること間違いなしです。子どもたちが描いた絵の袋を地域の方々にも配って、月に一度「クリーンアップデー」を設けるのもよいでしょう。もちろん、新聞社やテレビ局にアナウンスすることをお忘れなく！



## 第3章

### 具体的実践に向けての保育者の心得

園での効果的な環境学習・教育を進めるに当たっての考え方・具体的な方法を見てきました。具体的な実践に向けては、それを進める園、一人一人の保育者の環境問題や環境保全に対する意識、実践に向けての考え方ややる気が大きく影響します。

ここでは園全体で取り組もうという空気や一人一人のやる気を高めていく手順をみていきましょう。

**STEP 1** まずは、チェックシートを使って今の状況を見てみましょう。

エコでイイコを育てる  
**E-CO保育やれるかなチェック**

- スタッフ全員が環境問題や、そのための取組の重要性を認識している
- 園として環境学習・教育に取り組むに当たって、明確な考え方をもっている
- 園として環境に配慮した運営・管理を進めていくための明確な考え方をもっている
- 上の2つの考え方がスタッフ全員に共有されている
- 園としての考え方にに基づき、環境学習・教育の取組を行っている
- 園の子どもたちや保護者にもそうした取組に力を入れていることが理解されている
- 園として環境問題や環境保全、環境学習・教育についての情報収集やスタッフの提供に努めている
- スタッフは園生活で環境に配慮した行動を日々心掛けている
- スタッフは私生活で環境に配慮した行動を日々心掛けている
- スタッフとして環境問題や環境保全、環境学習・教育について意識的に情報収集、自己啓発に努めている
- の入らない項目は多いがとりあえずできることから頑張っている。これから取り組んでいこうという思いはある。



**STEP 2**

チェックした結果はいかがだったでしょうか。心掛け、やっていくことはいろいろありますが、とりあえずは最後の「レ」が入れば十分でしょう。

ここでは、具体化をスタートするに当たり、まずは園・保育者一人一人の立場で大切だと思われる役どころと心得を押さえておきましょう。

**園の立場として****1 使命（ミッション）を明らかにする役割**

今や環境問題は人類にとって最重要課題の一つであり、人々の健康で安全で幸せな生活を脅かしています。子どもたちの健康で安全で幸せな生活のための心身の発達を促進し、助長することを役割とする幼児教育（保育）現場で、環境学習・教育をその使命として位置付けることは必然とも言えます。とはいえ、様々な保育内容が期待される保育現場で、そのことを意識して実践していくためには、保育者自らの言葉で魅力的な目標に仕立てましょう。自分たちの取組の意味や価値が明確になれば自ずとやる気も高まります。

**2 方向性（ビジョン）を示す役割**

幼児教育の目指すところと、環境学習・教育のそれはほぼ同じと言っていいほど重なり合っています。だからといって、今まで通りの保育を行っていれば良いのでしょうか。環境学習・教育の具体化ということ言えば、今行っていることを環境学習・教育という観点でとらえ直したり、意味を考え直したりする必要があります。そのためには、自らの園の環境学習・教育を通じて育てて欲しい子ども像をしっかりと描いてみる。そのために現在の保育をどうとらえ直すか、あるいは新しい試みとして何を行うかを考えてみる必要があります。

**3 行動（アクション）を創り出す役割**

組織やグループがある事柄を一丸となって進めていくためには、具体的な目標やその達成のための手段をアタマとココロで納得していることが不可欠です。園として環境学習・教育を優先順位の高い保育内容として進めていくに当たり、使命の確認や方向性の整理・明確化を保育者全員の参画と協働のもとに行い、明文化し適切な場所に掲示するなど、「見える化」していきましょう。また、子どもたちにも分かる名称をつけたり、保護者向けの通信などのヘッダーやフッターにも必ず入れたりして、子どもたちはもとより、周囲の人たちの理解や参加を試みましょう。

**保育者の立場として****1 学習・教育の場を計画する役割（デザイン）**

地球規模で語られる環境問題を扱う環境学習・教育ですが、保育現場での取組では、年中・年長の子どもの対象に、ごく身近な自然の中での楽しい遊びを通して感じたり、気付いたり、考えたり、理解するといった様子が想定されます。その際、保育現場では「遊ばせておけば保育になるか」と議論になることがありますが、環境教育現場では「自然の中にいれば環境教育になるのか」と言われます。そのことを改めて考えてみる必要があります。

偶然的・非体系的な遊び中心の学習段階から、体系的・自覚的な保育が必要となってくる年代を対象とする難しさはありますが、学びの有効な手段である「遊び」をどう系統学習に生かせるか、保育の考え方、発達のメカニズムに詳しい保育者の皆さんのデザイン力（保育計画力）に期待がかかります。

**2 学習・教育の場を促進させる役割（ファシリテーター）**

環境に配慮した暮らしが実践できる人を育てることを目指す環境学習・教育では、環境の事柄についての知的・観念的理解もさることながら、態度や価値をはぐくむことが重要視され、参加型・学習者主体と言われる体験学習法が広く用いられます。そこでは、体験を通しての気づきや学びを体験学習の循環過程に沿って引き出し、促進させる「ファシリテーター」が重要な役割を担っています。保育者が一つの「ねらい」を実現させるために必要と思われる「望ましい経験」の場を整え、その経験を通して子どもの成長・発達を促そうとすることそのものです。そうした役割を環境学習・教育の視点で改めて意識してみてください。

**3 環境に配慮した行動の模範を示す役割（モデル）**

保育の中で、保育者がどう考え、どう行動するかが子どもたちに大きく影響するように、保育者自身の環境に対する意識や環境とのかかわり方が、そのまま子どもたちの環境学習・教育、環境に配慮した暮らしの実践モデルとなります。しかし、これを役割や立場で意識すると負担にもなるし、すぐに底が割れてしまいます。世間を見渡せば、環境に配慮することは以前のように特別なことでもなく、貧乏臭く不便でもなく、一人一人ができることからこうした暮らしづくりをすることは、ある意味当たり前でおしゃれで豊かなこととなりつつあります。無理せず、できることから楽しんでやることが見た目にも大切です。

### STEP 3

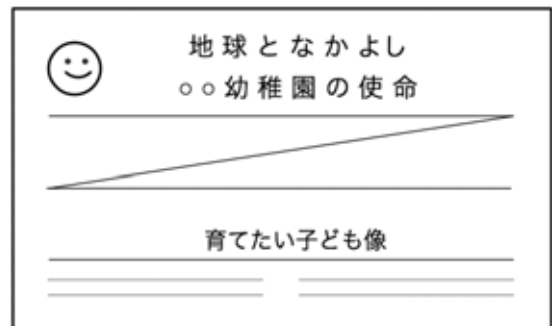
園全体で環境学習・教育に取り組んでいこうという空気や、保育者一人一人のやる気を創り出し、取組の質を高めていくには、取組の意味や価値が実感できる魅力的な目標を掲げ、それを「見える化する」(＝明文化し、身近にいつも目にできるようにする)ことが効果的です。

ここでは、園全体にとっての目標とも言える使命(ミッション)と方向性(ビジョン)、さらにそれらを実現に導く保育者一人一人のエコ保育スタイル(行動指針)を見える化しましょう。

## 使命(ミッション)と方向性(ビジョン)の見える化

### 【見える化の手順】

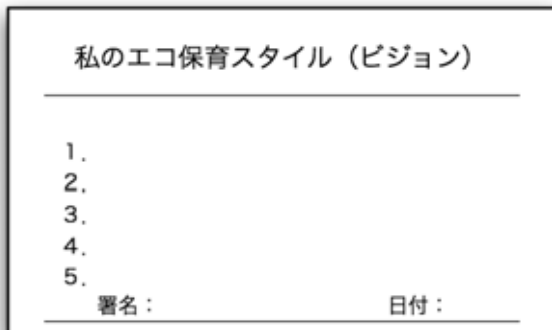
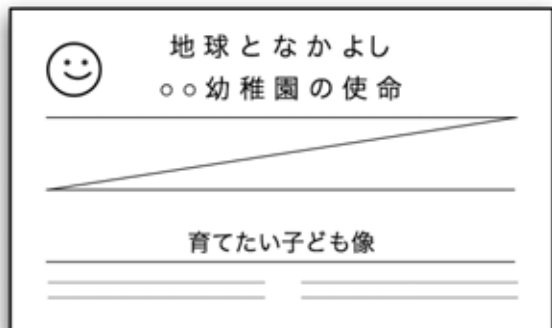
- 1 「園の環境学習・教育の実践で達成したいこと」「園の環境学習・教育の実践で育てたい子ども像」をテーマに、17ページのSTEP 2で紹介したラベルワークで整理する。
- 2 整理されたものを明文化する。  
ポスターにする(適当な場所に掲示)  
カードにする(保育者のエコ保育スタイルカードに印字。保育者一人一人が携行)



## 保育者一人一人のエコ保育スタイル(行動指針)

### 【見える化の手順】

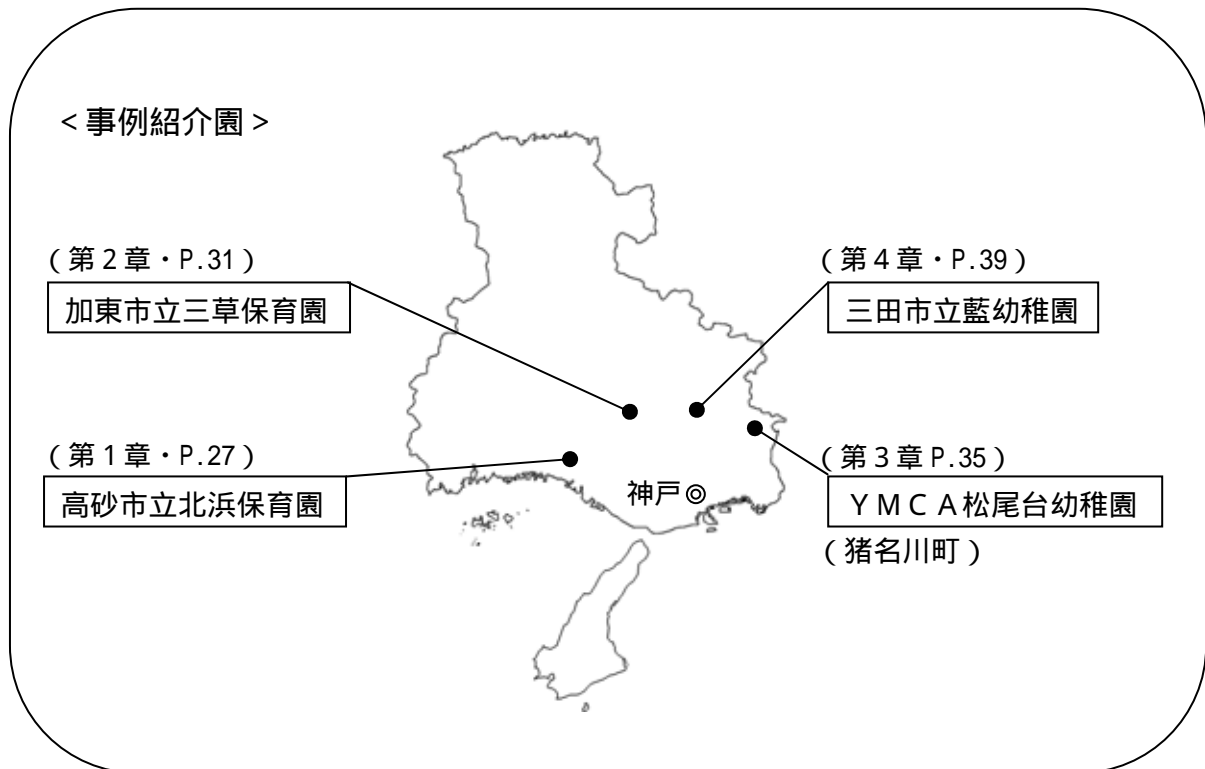
- 1 園全体で共有した使命(ミッション)・方向性(ビジョン)を改めて確認する。
- 2 保育者一人一人で、その実現のために大切・必要だと思う行動を書き出す。
- 3 書き出したものを見直し、その中の項目を抽出、あるいは統合して3～5項目にまとめる。
- 4 表面に使命、育てたい子ども像を印字したカードの裏面に3～5項目の行動指針を印字してできあがりです。
- 5 各自の行動指針を読み上げ、他のスタッフから励ましの拍手をもらい、決意を表すサインをします。後はカードケースに入れ、名札と一緒にストラップに止め、常時携行します。



さて、具体化に向けての考え方も押さえ、具体化の手順も見えてきました。また、具体的な取組をスタートするに当たっての心得も確認しました。いよいよ実践です・・・。

## 第3部

### 幼稚園・保育所における環境学習・教育の実践事例



### 第3部の基本構成について

第3部では、平成19年度に実施された幼稚園・保育所での環境学習・教育の実践事例4事例を掲載し、1事例4ページ構成としている。

ここでは、第3部の基本構成を説明する。

#### 第1ページ(概要)

平成19年度に取り組んだ環境学習・教育の概要等について記載している。

#### 第2・3ページ(実践事例)

平成19年度の環境学習・教育の取組から、代表的な取組を事例として紹介している。

#### 第4ページ(年間計画)

年間の取組を表で表した。第2・3ページの実践事例の位置も分かるようにしている。

第1ページ

第 章 〇〇	
1 園の現況	.....
2 環境学習・教育の実践概要	.....
(1) テーマ	.....
(2) ねらい	.....
(3) テーマ設定理由	.....
(4) 経緯と展開	.....
3 実践による成果と課題	.....

(前章の第4ページ)

#### 第2・3ページ

##### 活動名

事例の内容をイメージできるような名称にしている。

活動名(タイトル)	.....
【ねらい】	.....
指導のポイント	.....
【実践事例】	.....

##### 指導のポイント

環境学習・教育の観点を踏まえて、記載している。

##### 写真・図

##### 写真・図

関連箇所に適宜又は第4ページ上段にまとめて入れている。

##### 【成果と課題】

##### 成果と課題

環境学習・教育の観点を踏まえて、記載している。

##### 写真等

第4ページ上段は、第2・3ページからの続きとして、写真や図をまとめて、又は「4 成果と課題」等の本文を掲載している。

##### 年間計画

実践事例の年間計画を「自然体験」「生活体験」の観点から見た子どもたちの活動と、園における活動と合わせて掲載している。

#### 第4ページ

写真・図			
年間計画			
円における取り組み	自然体験	生活体験	
春			
夏			
秋			
冬			

(次章の第1ページ)

## 第1章

# 自然を通して、生命の不思議さを感じる

高砂市立北浜保育園

### 1 園の現況

本園は、高砂市の北西に位置する。

近年、宅地や高齢者施設等の開発が進み、近隣の山々の景観も変わってきているが、園の周辺は緑豊かで、園内の畑や近隣の田畑、公園等、地域の中で自然体験をすることができる。

地域には、数々の史跡が残り、子どもたちが気軽に見に行くことができる。町全体でその史跡や郷土の祭りを守り、保存しようとする郷土愛が感じられる。

園児は核家族化が進む中で、祖父母との同居も多く、保護者に代わって祖父母が送迎する姿もよく見られる。

### 2 環境学習・教育の実践概要

#### (1) テーマ

自然を通して、生命の不思議さを感じる

#### (2) ねらい

- ・収穫の喜びを体験し、自然に対する興味や関心を深める。
- ・地域への散策を通して、自分たちが住んでいる地域の素晴らしさを感じ、人とかかわりを広げる。

#### (3) テーマ設定理由

恵まれた地域環境を生かし、園外に出掛ける機会を多くつくり、地域の自然の中でのびのびと過ごす中で、生命の大切さや不思議さに気付かせていきたい。

また、保育園で長時間生活する子どもたちに、いろいろな人とかかわる機会をつくり、その交流活動を通して思いやりやさしさを感じる心

豊かな子どもにはぐくんでいきたい。

#### (4) 経緯と展開

年度当初、自然に触れ、農作物の生長などから「食育」を促していくよう計画を立てたが、環境学習リーダー研修を受けたことで、「自然の生態系が激変していること」「地球が危機にさらされていること」などを学び、この実態を子どもたちにも知らせる必要があると感じた。未来を担う子どもたちが、幼い頃から「環境」について関心をもつことの大切さを感じた。保育士自身が「環境」に対する知識不足もあり、子どもたちと共に調べたり考えたりしながら取り組んだ。子どもたちは幼いから理解できないのではなく、子どもたちに分かるように、保育の場で“しかけ(出合わせ方)”を工夫することが大切であることに気付いた。その“しかけ”を工夫することによって子どもたちの「環境」に関する関心が高まり、「気付く」から「関心をもつ」姿へと変わってきている。

### 3 実践による成果と課題

これまでも、地域散策や地域の人とかかわる保育を展開してきた。しかし、もう一步踏み込み、保育士自身が幅広い視野をもち、地域を知り、地域の人々の生の声に耳を傾け、より深く状況を把握することで、子どもたちに出会わせる状況づくりを工夫することができた。

“大人が変われば子どもも変わる” 今後は、保護者にも園の取組を発信し、保護者と共に、地域の人たちとかかわりをさらに広げ、環境やその変化に興味や関心をもてる子どもの育成に取り組んでいきたい。

## 地域を探索しよう：パート1

- 「水」って大事なんだね -

### 【ねらい】

- ・自分たちの住んでいる地域の史跡や民話に触れ、地域の素晴らしさに気付く。
- ・毎日使っている水の大切さに気付く。

### 指導のポイント

\* 園周辺マップを作る。

北浜の地域には史跡や神社仏閣がたくさんあり、自然も豊富である。民話や史跡の由来等を調べ、手作りマップを作成する。子どもたちが興味をもって、地域散策ができるようにこの地図を持って散策に出掛ける。

- ・地域の史跡を知る

#### 雨乞い行列

北脇山の麓から一本松の頂上まで、雨乞い行列をして登り、頂上で農作物が実るよう「雨乞いの儀式」を行った。

- ・水に関する民話(西浜の地)

#### 藤の井

昔、村の人々は塩気を含んだ水を飲んでいました。ある日、八幡様が西浜に立ち寄り、井戸を掘るように言われた。そこを掘ったところ、真水が湧き出てきて、それから人々は飲み水や田畑の水に困らなくなり、暮らしが良くなった。

### 【実践事例】

#### <事例1> 水を大切にしよう

(時期) 8月上旬 (対象) 3・4・5歳児

今年(平成19年)の夏は例年になく暑い日が続いた。子どもたちは、毎日、たくさんの水を使って遊んでいる。水の大切さに気付いてほしいと思い、環境学習リーダー研修で聞いた「温暖化」について図鑑や写真を使って子どもたちに話をする。テレビや家の人の話から興味をもっている5歳児が、「北極の氷が解けて、シロクマが住めなくなっている」「水が飲めないところがあるよ」「反

対に台風で洪水になって、家がなくなっている人もいるんだよ」と自分の知っていることを話している。

#### <事例2> 史跡めぐりをしよう

(時期) 8月中旬~10月中旬 (対象) 3・4・5歳児

当地域には昔から伝わる「雨乞いの儀式」がある。北脇山から一本松の頂上まで「雨乞い行列」が行われていたというコースを、子どもたちと歩いてみる。子どもたちは、山道を歩きながら「『雨乞い行列』ってどないしてするんやろ?」「太鼓をたたいたり、鐘を鳴らしたりするのかな」と言いながらその場で踊り出している。

また、「藤の井」の民話を聞き、今では蛇口をひねればいつでも出てくる水も、昔は塩辛かったり、井戸から汲んだりして大変だったことを知り驚く。

ここ北浜は、祭りが盛んで伝統を大事に守っている地域でもある。雨乞いの儀式・藤の井・祭りなどどれもつながっているものであり、水の恵みを受け、田畑の農作物を実らせ、五穀豊穡を祝う大祭を、毎年盛大に行っている。このことは、子どもたちが受け継ぎ、伝えていかなければならないことだと考え、「北浜のいまむかし」として子どもたちと話をつくり、運動会で保護者や祖父母、地域の人々に見てもらおう。その後、高齢者施設や地域の人たちにも見てもらおう機会をつくる。

### 【成果と課題】

保育士自身が地域のことをよく知り地域散策を通して、子どもたちに何を学ばせるのかという目的を明確にすることの大切さを感じる。子どもたちに分かるように“しかける”ことで、子どもたちは豊かにイメージを広げ、自分の生活に結びつけて考えていくことができる。また、子どもたちの気付きが、地域の人々にもこの地域に伝わる民話等を知らせるきっかけにもなったことは大きな成果であり、このような取組を今後も続けていきたい。

## 地域を探索しよう：パート2

- 私たちの町って素敵だね -

### 【ねらい】

- ・自分たちの住んでいる地域の素晴らしさに気づき、いろいろな人とのかかわりを広げる。

### 指導のポイント

- \* 「妖精」の仕掛けを作り、園内やのじぎく群生地に置く。

「水を出したら蛇口を閉めようね」「お花に水をあげてね」「お花を踏まないでね」など、子どもたちに気付いてほしいメッセージを「妖精」に託して園内に仕掛ける。声を出してしまうと「妖精」は消えてしまうという約束をし、見付けたときはジェスチャーで教え合う。地域の人々の協力を得て、のじぎく群生地にも「妖精」の仕掛けを置く。

- \* のじぎく群生地の世話をしてくれている地域の人と連絡を取り合い、群生地の花の状況を把握する。

のじぎく群生地：北浜・牛谷～日笠山・馬坂峠に自然に生えたのじぎく群生地がある。蕾の頃、満開の頃等、何度も訪れる。保存会の人々が世話をしている。その中に、園児の祖父もいる。

### 【実践事例】

<事例3> のじぎくハイキングに行こう  
(時期)11月6日 (対象)2・3・4・5歳児

のじぎくの開花時期になり、のじぎくの世話をしている園児の祖父から、「案内役をしてあげよう」という知らせが届く。園児の祖父の案内で、今年初めてののじぎくハイキングに出掛ける。

山道を散策しながら、野草や野鳥などの名前を覚えてもらったり、昔の様子を聞いたりしながら歩く。のじぎく群生地は、自然に自生している花ではあるが、保存会の人々のおかげで手入れが行き届き、美しい花を咲かせている。

のじぎく群生地は高台にあり、周囲が見渡せる。北側に見える町並みや道路、走り去る新幹線を見て歓声をあげ、「あれは石の山(石の宝殿)やで」「石がとれるんやって」と、5歳児が傍らにいた3歳児に、自分の知っていることを教えている。南側には瀬戸内海の海や賢島、うっすらと見える淡路島を眺めているうちに、いろいろな思いが巡ってきたのだろう。「あれは無人島やで、おじいちゃんが若い時、船で行ったことあるって言った」と話し、周りの子どもたちも真剣に耳を傾けている。

<事例4> のじぎくハイキングに行こう  
(時期)11月21日 (対象)4・5歳児

2回目の訪問は、ひょうごグリーンサポーターの人を案内しようと4・5歳児の子どもたちが案内役になり出掛ける。自然ともっと遊べるように“妖精”を事前にのじぎく群生地に仕掛けておく。子どもたちは、知っていることを教えてあげようと張り切っている。ちょうど満開の時期で、数十種類の花が咲いている。子どもたちは花びらの形や色の違いなどを得意げで話している。

花の間に仕掛けておいた“妖精”に気付いた4歳児が「妖精が来ている」と他の子どもたちに知らせている。サポーターの人にも知らせ、「大きな声を出すと(妖精が)消えてしまうからね。お花きれいでしょ」と言いながらかかわりを楽しんでいる。

### 【成果と課題】

豊かな自然を目の前にすると、大人も子どもも心が豊かになってくる。しかし、その自然もいろいろな人の手で守られていること、一人一人の「大切にしよう」という気持ちが大事であることなど、子どもたちに分かるように伝えていく必要がある。

自分が知っていることを「人に教える」という体験を通して、「大事に育てていくことが大切」ということに子どもたちが気付いていった。

おさんぽマップ

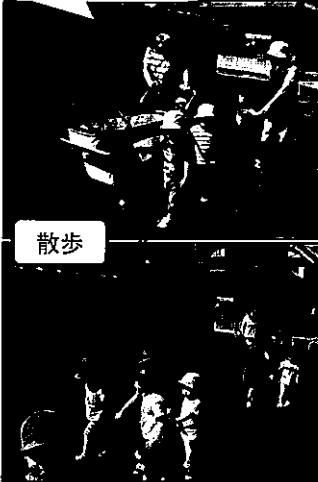
北浜保育園

わあー  
海が見えるよー

淡路島が  
見えるよ

おさんぽ  
きたはま  
マップ

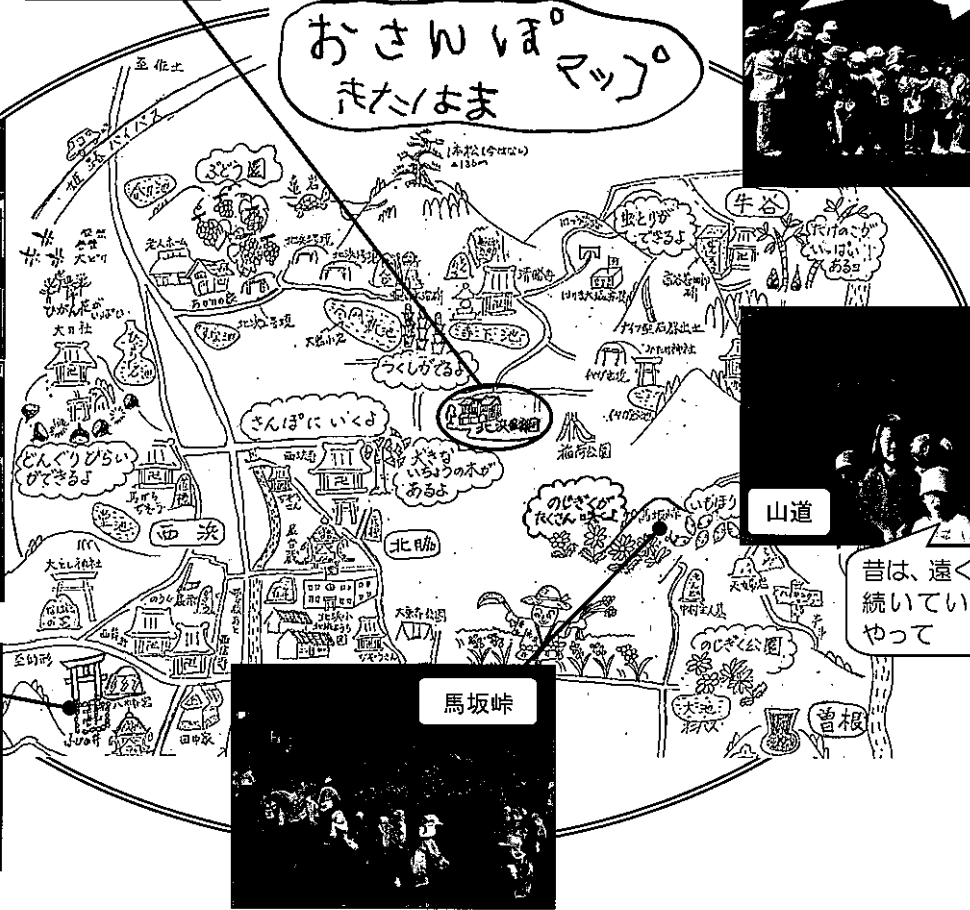
楽しいなあー



散歩

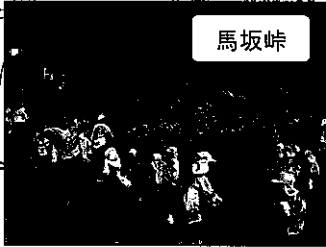


藤の井



山道

昔は、遠くまで  
続いていたん  
やって



馬坂峠

年間計画

内容 時期	園における取組	自然体験			生活体験	
		生命の大切さ・不思議さに気付く	自然の大きさ・美しさ・不思議さに気付く	地域の中の自然やそれにかかわる人々に親しむ	生活の中で環境やその変化に気付く	資源を大切にしようとする
春	・年間計画検討（食育・地域との触れ合いについて）	春を感じよう タマネギ・ジャガイモ・イチゴを収穫しよう			田畑の野菜を見に行こう	
夏	・年間計画の見直し（環境に焦点をあてて）	サツマイモ苗・イネを植えよう ツバメの巣を見つけよう・親子ツバメの様子を継続してみよう			水を大切にしよう<事例1>	
秋	・体験活動のふりかえり	ジャガイモを植えよう ドングリを探しに行こう			史跡めぐりをしよう<事例2>	秋祭りを楽しもう<事例2>
冬	・取組の反省および課題検討	サツマイモ・ジャガイモを収穫しよう タマネギの苗を植えよう			のじぎくハイキングに行こう<事例3・4>	初詣（大塩天満宮）に出掛けよう

人と人とのつながり



## 第2章

### 四季を通して自然とかかわろう

加東市立三草保育園

#### 1 園の現況

本園は、加東市の北部に位置し、周辺は田畑に囲まれ、遠くの山並みや空を見渡すことのできる環境にある。近隣には、小学校や図書館、神社、牧場などがある。地域の方の保育への関心も高く、地域に密着した園である。昔からの地域行事が多く残っており、子どもたちにとって、世代間交流する場となっている。

園児は、平日、起きている時間の多くを保育園で過ごす。そのため、戸外での活動や子ども同士のかかわりの場として、重要な役割を担っている。

#### 2 環境学習・教育の実践概要

##### (1) テーマ

四季を通して自然とかかわろう

##### (2) ねらい

- ・四季を通して同じ場所を訪れ、自然の移り変わりや美しさ、不思議さを感じ、興味や関心を深める。
- ・保育者や友達と協力して野菜を栽培し、五感で感じる体験をする。
- ・栽培活動を通して地域の人と交流をもつ。
- ・自然とかかわり、感じたことや気付いたことを、友達と言葉で伝え合う。

##### (3) テーマ設定理由

- ・年間を通して、園周辺の自然に触れ、遊ぶ機会をもっている。また、4・5歳児は、春と秋に同じ森に出掛けている。
- ・平成18年度より食育活動に取り組み、その中で、休耕田を借り、自分たちで野菜を栽培、収穫し味わう体験をしている。

- ・栽培活動、茶摘み体験を通して、地域の人や小学生との交流をもつ。

これらの取組を環境学習の視点から深め、継続的に取り入れていきたいと考える。

##### (4) 経緯と展開

前年度の保育をふりかえり、まず、4月当初に職員間（保育士・調理師）で話し合う時間をもち、園の年間計画を立てた。同時に、各年齢のねらいも共通理解し、自然体験を通して、異年齢児とのかかわりが十分もてるよう話し合った。また、園での取組を、便り等で保護者や地域の人に知らせ、活動への理解が深まるようにし、時には、参加・協力も依頼していった。

環境学習リーダー研修の受講、報告により、保育者が『感じること』の素晴らしさを実感することができた。同時に子どもたちにも、自然とのかかわりの中で、『生命の大切さ』を伝えることはできないかと、職員間で保育を見つめ直した。

#### 3 実践による成果と課題

環境学習の視点を明確にすることで、年間を通して、田畑や森などで自然とかかわり、実際に触れないと『感じること』のできない貴重な体験をすることができた。そういった園の取組が地域の人々の心を動かし、協力者が現れた。その協力者の姿に、今度は子どもたちの心が動かされ、感謝の気持ちが芽生えてきた。自然体験の積み重ねが、みんなの気持ちを揺さぶり、自然と人のかかわりを深めていった。異年齢児が一緒に取り組むことで、次年度へもつながっていく。地域と連携し、継続的に取り組むことが今後の課題である。

## 森へ出掛けよう

～四季を通して～

### 【ねらい】

- ・四季を通して、森に出掛けることにより、自然の移り変わりや美しさを感じる。
- ・森や水辺の動植物とのかかわりを楽しむ。
- ・自然とかかわり、感じたことや発見したことを保育者や友達と伝え合う。

### 指導のポイント

- \* 事前に森の下見をし、森の道を把握しておく。  
また、それぞれの場所で、どのような木や草花に触れることができるか知っておく。保育者自身が感じたことを、記録しておく。
- \* 季節の移り変わりが感じられるよう、同じ場所に繰り返し行く計画を立てる。
- \* 子どもの興味や関心、気付きや発見に寄り添い、かかわりがもてるよう、ゆとりをもった時間配分にする。
- \* よほどの悪天候でない限り、工夫をし、計画を実践する。( <事例4> の実践は、管理事務所の方にルートを知らせ、安全面の確認をして行っている。また、荷物の管理や休憩の場所等の協力も得る。)

### 【実践事例】

<事例1> 春の森を探検しよう  
(場所) ひびきの森(加東市上鴨川)  
(対象) 4・5歳児  
(日時) 4月20日(晴)9:30～13:30

ひびきの森は、本園から、車で10分程のところにある『鴨川の郷』にある。片道30分程で標高350mの展望台まで行ける。

例年、4・5歳児は春と秋にこの森に出掛けている。5歳児は、昨年も来ているので、森の様子はある程度分かっている。「川にサワガニおるか

な」「上まで行ったら、バスがミニカ-に見えるで!ほんまは、ぼくらより大きいけどな」と歩きながら友達と会話を弾ませ、足早になる。4歳児は、初めてで森の様子が分からない。ワクワクしながら5歳児の後をついていく子もいれば、少し歩いて疲れをみせる子もいる。

5歳児が後方を歩く4歳児に、「おーい!!」と声を掛ける。「おーい!!」と元気な返事が返ってくる。ちょっとしたことだが、このやりとりが森の中では楽しい。

20分程歩くと、汗がにじみ出てくる。「風吹かへんかな～」時折立ち止まり、子どもたちと風の心地よさを感じる。

展望台まで行くと、達成感を感じる。ここでは、十分に時間をもつようにした。子どもたちの目は、ミニチ



ュアのように見える建物や車に向けていた。保育者の山並みや空に目を向けた言葉に、子どもたちは遠くの景色にも目をやる。

下り道、森の中に差し込む木漏れ日が美しい。「きらきらしてきれい」「鳥の音が聞こえる」そんな子どものつぶやきに足を止め、共に感じる時をもつ。

<事例2> 川遊びを楽しもう  
(場所) 鴨川児童館側(加東市平木)  
(対象) 5歳児  
(日時) 7月18日(晴)10:00～11:00

鴨川地区の子どもたちとの交流、自然とのかかわりを目的とした行事である。この日は、前週の雨で水かさが増し、川遊びには最高の日であった。

自己紹介をし、川遊びの約束事を聞いてから、遊び始めた。水の中に足を入れた子どもたちは、山の水の冷たさに驚いていた。水の流れに逆らい歩いてみたり、サワガニ探しをしたりした。

しかし、サワガニをなかなか見付けることができない。子どもたちは、地元の子どもたちが、石をそっと動かし捕まえていることに気付き、早速同じようにしてみる。

大きいカニや小さいカニを、石の陰から次々と見付けることができた。カニの動きに興味をもち、じっと見たり、大きさ比べをしたりする。



カニ 見つけた!

時間を忘れて遊び、11時、帰る時間になった。子どもたちが「サワガニ、持って帰りたい」と言い始めた。サワガニは逃がすというのが約束だが、子どもたちの気持ちは抑えられない。以前、園でサワガニを飼育し、数日しか生きなかった体験をしている。その時に、「きれいな川の水やないとあかん」とつぶやいていたのに。だが、保育者の「みんなが、またサワガニに会いに来よう」という一言で、急展開した。

園に帰り、この出来事を園長先生に報告し、一か月後、再び川を訪れることになった。

<事例3> 秋の森を探検しよう  
(場所) ひびきの森(加東市上鴨川)  
(対象) 4・5歳児  
(日時) 11月8日(晴)9:30~14:00

繰り返し同じ森を訪れることで、子どもたちの楽しみは増しているようである。

春と違い、秋は森の道に、落ち葉の吹き溜まりがある。きれいな落ち葉や木の実を探し出し、見せ合う。「これきれい」、「ひげみみたいな葉っぱ見付

けた」とのんびりと周りのものに目を向けながら歩いた。園周辺では、見付けることのできない木々や草花もある。「この森だから咲いているのかな。摘むと枯れるかもしれないね」と保育者がつぶやいた。「とったらかわいそうや」、「また見に来たらいいやんな」と、子どもたちはつぶやく。植物への思いやりの気持ちが芽生えてきている。



こもればの道

今回、森で子どもたちとしたいことがあった。環境学習リーダー研修の時にした、森の中で立ち止まり、しばらく目を閉じるという体験である。展望台からの帰り道、子どもたちとしばらく目を閉じてみる。「風が気持ちいい」、「鳥の音がする」、「何かいいにおいがする。目を開けている時より、よう分かる!」とつぶやく。あの時、保育者が感じたことを子どもたちも感じていた。

<事例4> 雨でも出掛けよう  
(場所) ひびきの森(加東市上鴨川)  
(対象) 4・5歳児  
(日時) 平成18年5月16日(雨)10:15~14:00

計画した日は、あいにくの雨。子どもたちは、テラスから空を眺め、雨がやむのを待っている。その姿に、保育者の心は動かされた。雨の日の森に出掛けることにする。子どもたちは「ヤッター! 行ける~!!」と大喜びである。

今日は、なだらかな別のルートを、傘をさし、雨音を感じながら、散歩する。森の中に入ると、傘に打ちつける雨音が少なくなる。木々が大きな

傘になっているようだ。地面の落ち葉や草が水分を吸収してくれているため、ぬかるみも少ない。



この日の森の様子を子どもたちは、「恐竜探検しているみたい」とつぶやく。4歳児が滑らないように恐る恐る歩いていると、「ゆっくり歩いたら大丈夫やで」、「こっち、通り」などと、5歳児は年下の子を思いやる言葉を掛け、見守り待つという姿が見られる。

子どもの興味を引いたのは、池の水に雨粒が落ち、水面に模様を描いている様子である。水の透明度が高いこともあり、より美しく感じる。そし

て、小川の水量や水音、流れである。「すごい水や！！今日、雨が降るとるからやで」、「(水の)音が大きい！」など気付きや発見を伝え、眺めている。

11時半頃、空が明るくなった。予定通り午後も森で過ごした。

### 【成果と課題】

4・5歳児と2年続けて同じ森に掛けることで、四季のめぐりを感じることができる。森の中で、木々や草花に目を向けたり、しばらく目を閉じてみたりすることで、気付きや発見がある。保育者や友達と感じたことを伝え合うことで、認めてもらう喜びを感じたり、新たな発見をしたりすることができる。また、自然の中で動植物とかわり、それらの生命を感じ、大切に思う気持ちが芽生えてくる。今後も、これらの活動を環境学習の視点でもとらえながら、継続的に進めていきたい。

## 年間計画

内容 時期	園における取組	自然体験			生活体験	
		生命の大切さ・不思議さに気付く	自然の大きさ・美しさ・不思議さに気付く	地域の中の自然やそれにかかわる人々に親しむ	生活の中で環境やその変化に気付く	資源を大切にしようとする
春	<ul style="list-style-type: none"> <li>職員間で話し合い、環境学習の年間計画を立案</li> <li>三草小学校との連携活動について伝達</li> </ul>	ツバメの巣を観察しよう	園周辺の桜めぐりをしよう		窓からの景色に興味をもち、林を観察しよう	
夏	<ul style="list-style-type: none"> <li>環境学習リーダー研修に参加、報告</li> <li>鴨川児童館との交流計画を立案</li> <li>年間計画を再考</li> </ul>	野菜を育てよう	小学生と茶摘みをしよう			
秋	<ul style="list-style-type: none"> <li>いずみ会に食育教室を依頼</li> <li>はばタンと環境学習</li> <li>畑の管理協力を依頼</li> </ul>	収穫した野菜を使って親子でクッキングをしよう			はばタンの環境学習に参加しよう	
冬	<ul style="list-style-type: none"> <li>次年度に向け、方向性を検討</li> </ul>	野菜の苗を植えよう			栽培物の皮や野草で布を染めよう	雲から天気や季節を感じよう

人と人とのつながり

## 第3章

### 一年を通した環境教育 ～身近な自然からはぐくむ小さなころ～

Y M C A 松尾台幼稚園

#### 1 園の現況

大阪府、京都府との府県境に位置し、辺りは、自然に囲まれている。園内においては、園庭が2か所あり、中庭は全面芝生、裏庭は自然のままを残し、タンポポやシロツメクサなどの植物をはじめ多種の木々があり、一年を通して四季を身近に感じることでできる環境にある。また、園で飼育している多くの小動物との触れ合いの中で小さな「いのち」の存在や大切さに気付くことができるように環境を整備している。

園の周囲には自然が身近にあるが、最近では保護者を含め、なかなか実際に触れる機会や体験が少なくなってきた。そのため、卒園児や地域のネットワークを生かした地域活動委員のボランティアの人々と共に、子どもの感性をはぐくむために五感を十分に使えるような活動を保育に取り入れ、さらにそのことの大切さを保護者に訴えている。

#### 2 環境学習・教育の実践概要

##### (1) テーマ

一年を通した環境教育  
～身近な自然からはぐくむ小さなころ～

##### (2) ねらい

・一年を通して自然とのかかわり、感じる・遊ぶ・考えるをキーワードに豊かに親しむ。

##### (3) テーマ設定理由

私たちにとって何よりも一番大切な「いのち」を守ってくれている地球が危ない、ということは何とか子どもたちに伝えたい。「どうしたら、いいのかわかるのか」、「何から始めたらいいのかわかるのか」、難しくてなかなか手をつけられなかった。そこ

で、「何が足りないのか」、「どういう工夫があるのか」を教職員で話し合う中で、身近にある園内や園周辺の自然を見つめ直すこと、子どもと一緒にできることから取り組んでいこうということになった。日常の中で何気なく感じたり、触れたりしていた「自然」や体験することで満足してしまっていた「自然体験」を見直し、「環境学習・教育」の視点を意識した取組を進めていこうと考えた。

#### (4) 経緯と展開

日々の保育の活動の中の「ちょっとしたこと」から行動をしようとした。子どもたちが新たな気付きや感じる力を身に付けてくれることを願い、教職員一人一人が少しの工夫と意識の持ち方を変えて取り組んでいくように心掛けた。また、地域の人々に協力してもらいながら、子どもたちと共に考えながらできること、楽しく取り組むことで豊かな環境教育への感性をはぐくまれることを目指した。

#### 3 実践による成果と課題

一年を通して身近な自然を見つめ直すことで、改めて「いのち」の大切さを日々の保育の中で感じる事ができた。今回は、花とのかかわりを通して、教師や周囲の人々が細やかにかかわることによって、小さな花にも「いのち」があることに気付き、大切にしようとする気持ちが芽生えるなど子どもたちの成長を見ることができた。今後も、子どもたちの豊かな感性をはぐくんでいくためにも、教師自身が自然に対する感性を磨き、環境学習・教育の視点をもつ姿勢を大切にしていきたい。

## お世話になっている人にお花を届けよう

### - 「花の日」に思いを込めて-

#### 【ねらい】

- ・家の庭に咲いている花や道端に咲いている花などを全園児が少しずつ幼稚園に持ち寄り、「花の日」を知り喜ぶ。
- ・それぞれの花の美しさに気付き、花にも「いのち」があることを知る。
- ・自分たちも花と同じようにたくさんの人から見守られ愛されていることを知り、感謝の気持ちをもつ。
- ・花束を作り、地域で日頃お世話になっている人々に感謝の気持ちを込めて届け、喜びを感じる。

#### 指導のポイント

- \* 花や植物を栽培し触れることで自然の恵みや生命を身近に感じるだけでなく、地域や生活へとどういうふうに結び付いていくかを考えて取り組む。
- \* 花を通して普段自分たちの周りには、知らないところでいろいろな形でたくさんの人に見守られているということに気付くことができる機会とする。
- \* 保育者自身も子どもと共に、自然の恵みを受けながら生きていることを感じられるようにしていく。
- \* 「花の日」の趣旨を保護者に連絡し、協力を依頼する。
- \* 近隣施設（郵便局・派出所・消防署・動物病院など）との連携を図る。

#### 【実践事例】

花の日

（時期）6月初旬 10時～12時

（対象）全園児（3～5歳児）

本園では、6月に花の日という日を設けている。どんなに小さな花にも「いのち」があること、また、人もその「いのち」をいろいろな人に守られていることを知り感謝する機会としている。普段何気なく見過ごしていた花を見ながら、改めて日々の生活の中で感謝する気持ちを感じることができるよう願って行っている。



花の持参については、前もって各家庭に花の日の案内を配布し、この趣旨を伝え、花を持参することを依頼している。

当日子どもたちは、少し照れくさそうな、また、とても素敵な笑顔で花束を握り締めて登園してくる。大きな花束にラッピングされたものや一輪の可憐な花、「このお花、おじいちゃんの家で咲いていたの！」「お花屋さんで選んできたよ！」と口々に言いながら、みんなとてもうれしそうに差し出す。教師が「ありがとう！」「きれいなお花だね！」と答えるのにっこりとほほえむ。いろいろな花が集まり、その種類の多さや同じように見えても形がどれも違うこと、また、良い香りがしていることを感じる。

集められた花は、いろいろな種類を取り混ぜて花瓶や花束にしてホールに飾る。ホールでは、花の香りを感じながら、「たとえ、小さな花でも大切な「いのち」があること」「同じ花でも、みんな形や色が少しずつ違うこと」などの話を聞き、大切な「いのち」について考える時間をもつ。



その後、各クラスで日頃お世話になっている人々に花束を届ける。行き先は、年齢によって距離などを考慮し決める。

3歳児は、園バスの運転をしてくれている人や毎日、幼稚園をきれいに掃除してくれている人、いつも世話になっている事務の人々に届ける。自分たちが持ってきた花を花束にし、身近な人に渡せたことで「ありがとう」の気持ちが自然と高まったようで、とてもうれしそうな表情が見られる。

4歳児は、派出所と郵便局の人々に、5歳児は、動物病院と消防署の人々に感謝の気持ちを込めた手紙を事前に用意し、歌と共に花束に添える。

どの人からも心からの「ありがとう」という言葉を聞き、子どもたちの心も穏やかで大喜びの一日になる。

### 【成果と課題】

花に囲まれた子どもたちは、自然とやわらかい表情になり、幼稚園全体がやさしい雰囲気にも包まれたように感じられた。花の持つ力の大きさ、不思議さを教職員も改めて気付かされた一日となった。これからも幼稚園、家庭、地域とが、子どもたちの思いを受け止めて、共に豊かなところをはぐんでいくことができるようにしていきたい。

身近な自然とじっくりかかわることによって小さな「いのち」を大切にすることをはぐくみ、

自然を愛せる人になってくれることを願って、工夫しながら継続していかなければならない。

しかし、何よりもまずは、もっと自分の周りの環境から見直し、園内、地域社会から地球環境へと広がる学習へと結び付けてくよう大きな心でとらえていきたい。そのためには「身近な環境」を子どもたちともっと愛し、守り育てていく必要がある。

春の散歩では、花を好きなだけ摘んでいる姿や捕った昆虫を家に持って帰る子どもが多く見られた。一年を通して「花」などの身近な自然に触れる中で”ちょっとしたこと“から気付く感性をはぐくむことに取り組んだ。はじめは、子どもたちに気付いてほしいということを重点に考えていたが、実際は保育者自身の気付きや視点を工夫することが日々問われていることが分かった。そして、いろいろなことを経験し、感じ、気付く中で「この花、きれいやなあ。ちゃんにも見せてあげよう!」、「この虫おもしろいなあ。でも捕ったらあかんよ!(虫さん)お友達の家遊びに行く途中かも!」など、知らず知らずのうちに大切なことを学んでいる姿が見られるようになってきている。

こうした子どもたちの有り様を意識して、これからは環境学習・教育と結ぶためには「日常性」と「継続性」が大切である。そして、子どもの安定した自然観を形成していく基盤としていきたい。



# 自然いっぱいの園庭

<芝生園庭>  
一年を通して、グリーンフィールドの中で、裸足で活動している。

<畑で作っている野菜>  
春：イチゴ・タマネギ  
夏：トマト・ナス・スイカ・ジャガイモ  
秋：サツマイモ・ナンキン・ニンジン  
冬：ダイコン

カマキリだ！  
どこにいくのかな？

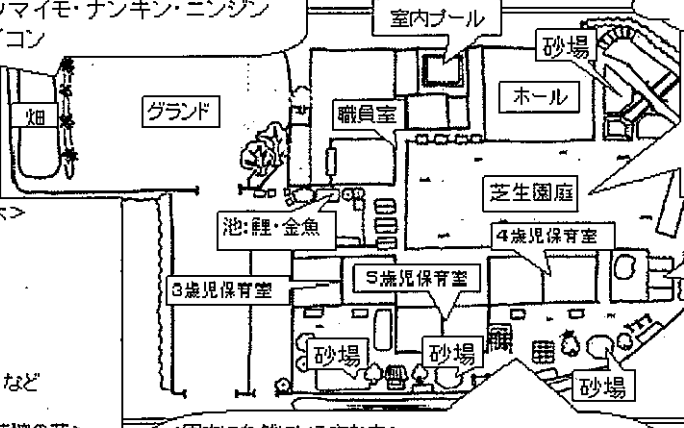
<園内にある木>  
ソメイヨシノ  
ヒマラヤスギ  
メタセコイヤ  
サルスベリ  
マツ  
キンモクセイ  
ウバメガシ など

<プランター・花壇の花>  
パンジー  
サルビア  
マリーゴールド  
ゼラニウム  
ピオラ  
バジルク など

<園内に自然にいる主な虫>  
トノサマバッタ ナメクジ ショウリョウバッタ  
ミス オオカマキリ ソウムシ  
コガタスズメバチ カミキリムシ オニヤンマ  
アブラゼミ シオカラトンボ アトトンボ  
アゲハ カブトムシ モンシロチョウ  
カタツムリ など

<飼育動物>  
ウコッケイ  
ウサギ  
アヒル  
カモ

敷地面積：7,582㎡  
建築面積：1,623㎡  
芝生園庭：800㎡  
グラウンド：2,100㎡



## 年間計画

内容 時期	園における取組	自然体験			生活体験	
		生命の大切さ・不思議さに気付く	自然の大きさ・美しさ・不思議さに気付く	地域の中の自然やそれにかかわる人々に親しむ	生活の中で環境やその変化に気付く	資源を大切にしようとする
春	畑のイチゴ、タマネギを収穫するに当たり、地域の人に協力を依頼 地域の関係施設に協力を依頼	近くの原っぱや公園に出掛けよう			ファミリーで自然の中に出掛けよう	
夏	トマトなど野菜の栽培をするに当たり、地域の人に協力を依頼 職員が環境学習リーダー研修に参加	お世話になっている人にお花を届けよう (実践事例)	近くの原っぱや公園に出掛けよう		テントに泊まって非日常的な生活を体験しよう	
秋	地域から依頼があり、里山の手入れに協力 地域と話し合い	夏の自然を体験しよう (キャンプ)	畑の野菜を収穫しよう		地域の畑や山の手入れをお手伝いしよう	
冬	畑に野菜の苗を植えるに当たり、地域の人に協力を依頼	冬の自然を体験しよう (キャンプ)			ほんの少し自分たちにもできることを考えよう (エコプログラム)	

人と人とのつながり



## 第4章

### 地域の自然から学んだこと ～自然体験活動を通して～

三田市立藍幼稚園

#### 1 園の現況

三田市の西北部に位置し、周囲を山や川、田畑に囲まれた自然豊かなところにあり、四季の移り変わりを肌で感じることができる。農村地域に位置するが、住宅地域から通園している子どもが半数以上いる。家庭で自然に触れる活動を体験している子どもはとても少ない。

#### 2 環境学習・教育の実践概要

##### (1) テーマ

地域の自然から学んだこと  
～自然体験活動を通して～

##### (2) ねらい

- ・自然体験活動を通して、地域の人々とかかわり、その楽しさを知る。
- ・地域の自然に親しみ、素晴らしさを感じる。

##### (3) テーマ設定理由

家庭では核家族化が進み、子どもたちが自ら周りの環境にかかわって体験を積み重ねる機会が少なくなっている。また、子どもたちは生活の中で友達や周囲の大人たちといろいろな経験を共有したり、共に感動したりする機会が少ないように感じる。恵まれた自然の中で過ごしていても、意識して見たり、触れたりしたことのない子どもたちがほとんどである。

教師自身が自然の中で遊びながら、動物や植物などと触れ合い、その素晴らしさや不思議さに気づき、「どうして?」「なぜ?」と感じる体験をすることで、子どもたちの学びも豊かになっていくと思い、自然体験活動を計画した。恵まれた自然との触れ合いを通じた遊びの中か

ら自然の多様性や循環性に気づき、生命の大切さを実感し、美しいものに心を動かされ、友達とその感情を共有することで人間性や社会性など豊かな心が養われていくと考え、自然体験活動を進めていった。

#### (4) 経緯と展開

身近な人(小・中学生、地域ボランティアなど)との交流の機会を多く持つような自然体験活動を計画し、地域のいろいろな人に支えられているという安心感を持ち、生まれ育った地域を愛する心情を育てようと考えた。

同じ場所で継続的な体験活動を積み重ねることで、人と自然と生活がつながった自然観がはぐくまれるのではないかと考え、実践を進めた。

#### 3 実践による成果と課題

地域ボランティアの人々の協力を得ながら、自然体験活動を実施することができた。保育の中で教師は、環境教育への視点を明確にし、体験活動を実施したことで、子どもたちは、自然の営みや恵み、素晴らしさに気付くことができ始めた。また、その経験をふりかえることで子どもたちは、環境学習につながる力を持ち始めたと感じる。体験活動のふりかえりを積み重ねることにより、発見や疑問、さらには学びが明らかになっていった。また、友達と考えを折り合わせていく中で、協同的な学びになり、幼児の自然観が培われていくと感じた。

教師が保育を見直し、身近な自然や身の回りのことに気を配り、環境を大切にすることで、その時にしかできない出会いや経験ができた。そのような教師や大人の姿勢が大切だと感じた。

## サンキュウ牧場での体験から

### 【ねらい】

- ・動物との触れ合いを楽しみながら、命の大切さに気付く。
- ・山や川での遊びから、楽しさや自然の素晴らしさや不思議さに気付く。

### 指導のポイント

- \* 牧場の下見をし、牧場主から動物との触れ合い方や餌の話聞き、教師が動物や里山の自然について予備知識をもっておく。
- \* 子どもたちが動物との触れ合いを楽しめるよう、保護者に餌の協力を求める。
- \* 子どもたちが十分に楽しめるように時間に余裕をもった計画を立てる。
- \* 継続して同じ場所で体験活動を行い、四季の変化を肌で感じる。

### 【実践事例】

(場所) サンキュウ牧場 (三田市藍本)  
(対象) 4・5歳児  
(日時) 5月23日(晴)9:30~14:00 <事例1・2>  
9月5日(晴)9:30~14:00 <事例3>  
12月12日(曇)9:30~12:00 <事例4・5>

体験活動の中で、牧場主のお話は、子どもたちにも教師にも心に響くものがあった。

#### <事例1> サンキュウの意味

...牧場主の話

ここにいる動物たちは、捨てられたり、助けてもらったりした動物がいるんだよ。みんなにも命があるでしょう？動物たちにもあるんだよ。そのままにしておくと死んでしまうから、おじちゃんが引き取って飼っているんだよ。命をありがとうの、サンキュウという名前を牧場につけたんだよ。

牧場主の命を守ろうとする気持ちや自然を愛し

守ろうとする姿、そして、その素晴らしさを私たちに伝えようとする姿に感動し、本物に触れる経験を子どもたちにさせたい気持ちを強く持った。

#### <事例2> ウマ(ハヤテ)にあいさつ

牧場のお約束です。ウマがこの牧場のリーダーです。先生みたいかな。ハヤテにこれから牧場に入りますよってあいさつをしなければいけません。あいさつをするとハヤテはみんなのことを一人ずつ覚えていきます。あいさつの仕方は、一人ずつ手をパーにして、ハヤテに餌をあげてください。そうすればハヤテは、匂いで覚えてくれるんだよ。やってごらん。

子どもたちは真剣な表情で手を差し出してハヤテに餌をあげていた。ハヤテが餌を食べるとその表情は和らぎ、牧場の中へと入って行った。しかし、動物が怖い子には大きな関門だった。見たことも触れたこともないウマやヒツジに近付き触り、その感触を味わっていた。

動物には、動物たちのルールがあること、その中に入るときにはそのルールを守ることを学んだ。自然の中では、人間は共存者であることを実感した。

#### <事例3> サンキュウの川遊び(キャッチ&リリース)

捕まえたものを見てみようかな。これは、シマエビ。きれいな水の中にしか住まないんだよ。

子どもたちの疑問にすぐに答え、一つ一つの生き物の生態を分かりやすく話してもらったことで、「あそこに行けば、いるんだ」と一層興味を持っていた。よく知ると、子どもたちは、自分の見つけた生き物を「幼稚園や家に持って帰りたい」という気持ちが強くなった。環境学習の観点からは、元の場所に返すほうがよい。子どもたちにとっては、理由が分からないだけに、「嫌だなあ」と納得できないようだった。

捕まえて、よく見た後は、元いたところへ返してあげようね。そうしてあげないと、そこで卵を産めなかったり、そこに住めなくなったりするので、いなくなってしまうんだよ。

水の種類(淡水・海水)によって魚たちは、すむところを分けているんだよ。この少し下の堰には、清流にすむ魚が40種類も住んでいるんだ

今いるものを大切にすることをお教へもらった。「たくさんいるから」などと、安易に小動物などを幼稚園に持ち込んでしまっていたことを反省する。自然との向き合い方を改めたい。この経験が将来子どもたちの心に、「ここに素晴らしい自然がある」と残っていることを期待する。

#### <事例4> 命はひとつ

幼稚園に地域の人を招待した時に、牧場主から、ウマ(ハヤテ)の死を聞いた。このことをどう受け止めるか、職員で協議した。子どもたちには事実を伝え、命について考え合う機会とした。牧場に出掛け、ハヤテが生きていた場所で子どもたちと一緒に命について考え合うことにした。

みんな、来てくれてありがとう。きっと、ハヤテもみんなのこと、忘れへんよ。おじちゃん、嬉しいわ。・・・ウマやヒツジいろいろ動物や人間もそうやな、いつかは死んでいなくなってしまうんだよ。これが命なんやで。・・・ありがとう。

涙ぐみながら話される牧場主を見た子どもたちは、おじさんの悲しい気持ちを受け止めているように感じた。ハヤテと遊んだ経験、ハヤテが死んでしまった悲しみは、子どもたちの心の中にしっかりと残り、これからの人生の中でいつか、思い出されることと思う。

#### <事例5> リクガメは風邪をひくんだよ

カメさんはね、今は寒いから、暖かいお部屋の中にいるんだよ。このカメは、本当は暖かい国

に住んでいるから、寒いところに出ると風邪をひくんだよ。カメさんが風邪をひいたらどう思う?暖かいお風呂にいらして、風邪を治すんだよ。そうしたら、風邪が治るんだ。このカメさんが入るお風呂は、皆が遊ぶプールみたいなものを使うんだよ。

リクガメの背中に乗ることができなかったことで子どもたちは、自分たちの暮らしと比較し、同じようにカメも暮らしていることに気付いた。

山の中も冬を迎え、以前来たときと違っていた。木の葉の見分け方やその名前、遊び方、木の実(ケンポウナシ)の試食などをし、自然の楽しさや不思議さを体感することができた。

#### 【成果と課題】

子どもたちの体験の前に、教師が身近な自然に興味や関心を寄せ、自然観や環境観をもつことが大切だと感じた。環境学習の視点からねらいを明確にしたことで、体験活動を通して、たくさんの学び(季節・触れ合う楽しさ・不思議さ・命等)を得ることができつつある。また、牧場主の子どもの視線に立って疑問に答えてくれる姿に学び、教師も環境観に関する知識や見方を子どもたちと共に、さらに高めていかなければならない。

自然は、偶発的に様々なことが起こり、そのことへの興味関心が、感動体験につながる。そこで、一人一人の幼児が何を感じどのような体験をしているのかを捕らえ、教師もそれに共感していくことにより、より深い感動を味わえることができると思う。教師は今まで保育に都合がよいように自然とかかわってきたのではないだろうか。環境学習を学んでいくと反省点がたくさんあることに気付いた。今までの自然観を見直し、今後、自然の見方や付き合い方、知識等を専門家と交流しながら磨いていき、「当たり前」と感じていたことが「不思議」につながる自然体験活動を進めていきたい。



# 資料編

## 兵庫県によるサポート

兵庫県では、幼児期の環境学習・教育の実施を支援するため、次のようなサポートを行っていますのでご活用ください。

ひょうごっこグリーンガーデン実践園でなくても活用いただけます。

### 地域環境学習コーディネーター

人材や活動場所の紹介、実施内容の相談対応等のコーディネートを行い、地域における環境学習・教育の実践の円滑な実施を図っています。

- ・ 配置：各県民局に1名
- ・ 業務：指導者・支援者等の人材紹介、活動場所紹介、実践内容の相談対応など、環境学習・教育の実践のコーディネート
- ・ 問い合わせ先：各県民局環境課（右ページ参照）

### ひょうごグリーンサポーター

子どもたちの環境学習・教育にかかる活動を支援する意欲を持つ人を公募し、各県民局ごとに登録しています。

子どもたちの活動に次のような支援ができる方に登録を呼びかけています。

#### 農作業体験

- ・ 田畑を環境学習に提供してくださる方
- ・ 農作業を指導してくださる方
- ・ 植えたお米や野菜の水やり等田畑を管理してくださる方

#### 里山体験

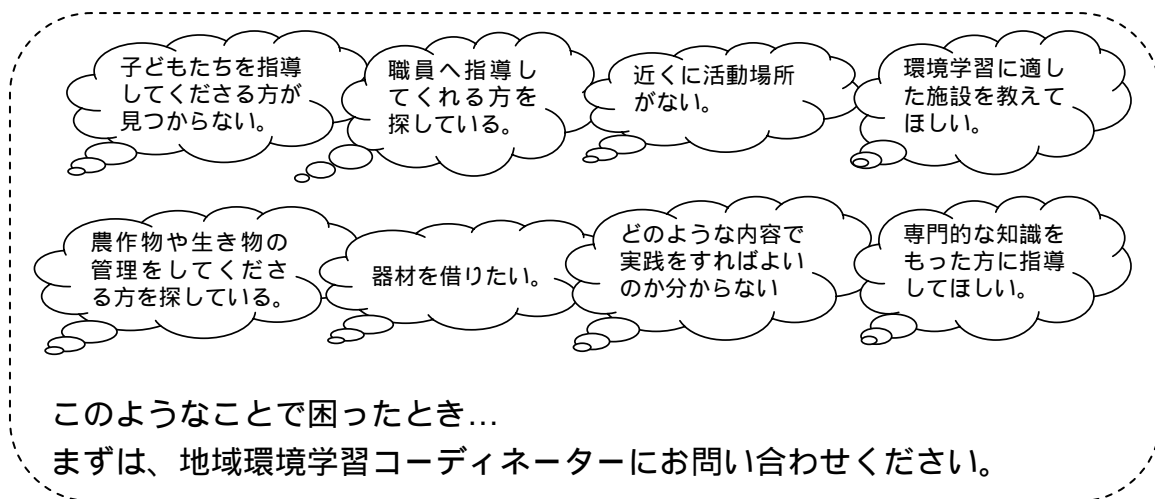
- ・ 里山を環境学習に開放してくださる方
- ・ 里山や森の動植物に詳しい方
- ・ 里山での自然体験を指導できる方

#### 水辺体験

- ・ 海の生き物に詳しい方
- ・ 小川や川べりの動植物などに詳しい方
- ・ 浜辺の動植物などに詳しい方

#### 自然体験

- ・ 鳥や昆虫、花や木などに詳しい方
- ・ 五感を使った自然観察を指導してくださる方
- ・ 問い合わせ先：各県民局環境課（右ページ参照）



### <問い合わせ先>

地域環境学習コーディネーター、ひょうごグリーンサポーターについては、最寄りの各県民局環境課までお問い合わせください。

担当窓口	住 所	電話番号(直通)	所管市町
神戸県民局 企画県民部環境課	〒650-0004 神戸市中央区中山手通 6-1-1	(078)361 - 8628	神戸市
阪神南県民局 県民生活部環境課	〒660-8588 尼崎市東難波町 5-21-8	(06)6481 - 4654	尼崎市、西宮市、 芦屋市
阪神北県民局 県民生活部環境課	〒665-8567 宝塚市旭町 2-4-15	(0797)83 - 3145	伊丹市、宝塚市、 川西市、三田市、 川辺郡
東播磨県民局 県民生活部環境課	〒675-8566 加古川市加古川町寺家町天神木 97-1	(079)421 - 9130	明石市、加古川市、 高砂市、加古郡
北播磨県民局 県民生活部環境課	〒673-1431 加東市社字西柿 1075-2	(0795)42 - 9377	西脇市、三木市、 小野市、加西市、 加東市、多可郡
中播磨県民局 県民生活部環境課	〒670-0947 姫路市北条 1-98	(079)281 - 9202	姫路市、神崎郡
西播磨県民局 県民生活部環境課	〒678-1205 赤穂郡上郡町光都 2-25	(0791)58 - 2137	相生市、たつの市、 赤穂市、宍粟市、揖保 郡、赤穂郡、佐用郡
但馬県民局 県民生活部環境課	〒668-0025 豊岡市幸町 7-11	(0796)26 - 3650	豊岡市、養父市、 朝来市、美方郡
丹波県民局 県民生活部環境課	〒669-3309 丹波市柏原町柏原 688	(0795)73 - 3773	篠山市、丹波市
淡路県民局 県民生活部環境課	〒656-0021 洲本市塩屋 2-4-5	(0799)26 - 2071	洲本市、南あわじ市、 淡路市

## Webサイト

### 環境学習・教育を進めるうえで便利な情報（子ども向け）

#### 環境省こどものページ（環境省）

<http://www.env.go.jp/kids/>

- ・環境省の子ども向けサイトです。

#### 子ども環境白書（環境省）

<http://www.env.go.jp/policy/hakusyo/kodomo.html>

- ・『環境白書』を子ども向けに分かりやすくイラストや図で説明しています。

#### 子ども環境情報センターエコっ子ナビ（環境省）

<http://www.eeel.jp/ecoco/>

- ・キャラクターによる解説、クイズ、ゲームなどで楽しく環境を学べます。

### 環境学習・教育を進めるうえでの便利な情報（大人向け）

#### 兵庫の環境（兵庫県）

<http://www.kankyو.pref.hyogo.jp/JPN/apr/index.html>

- ・兵庫県の環境に関する情報やデータが紹介されています。

#### ひょうごエコプラザ（（財）ひょうご環境創造協会）

<http://www.eco-hyogo.jp/ecoplaza/>

- ・ひょうごエコプラザの利用案内、県内で開催のセミナーなどの情報などが掲載されています。

#### E C O学習ライブラリー（環境省・文部科学省）

<http://www.eeel.jp/>

- ・環境学習・教育に関する情報が総合的に紹介され、指導者向けの情報もあります。

#### エコライフハンドブック（内閣府）

<http://www5.cao.go.jp/seikatsu/sho-ene/index.html>

- ・省資源・省エネルギーに取り組むポイントが紹介されています。

### みんなで取り組んでみよう

#### こども版環境家計簿 こどもエコチェック手帳（（財）ひょうご環境創造協会（兵庫県地球温暖化防止活動推進センター））

<http://www.eco-hyogo.jp/junioreco/>

- ・自分の行動や家庭の生活をチェックし、自分たちでできることを考えます。

#### こどもエコクラブ（環境省）

<http://www.env.go.jp/kids/ecoclub/>

- ・身近な地域で楽しみながら環境活動に取り組むクラブです。幼児の参加可能です。

#### 我が家の環境大臣（環境省）

<http://www.eco-family.go.jp/index.html>

- ・環境にやさしい行動を宣言すると「我が家の環境大臣」に任命されます。



『ひょうごっこグリーンガーデン実践事例集』作成委員会委員名簿

川島 憲志	フリーランス
大滝 あや	環境教育事務所 T a o 舎 代表
澤田 愛子	神戸市立東灘のぞみ幼稚園 園長
松山 孝博	社団法人兵庫県保育協会 理事 社会福祉法人千草福祉会千草保育所 施設長
中岡 宣子	三田市立藍幼稚園 園長補佐
山地 弘伸	Y M C A 松尾台幼稚園 教諭
鳴瀬 文代	高砂市立北浜保育園 主任保育士
出井 美穂	加東市立三草保育園 保育士
大西 眞弓	兵庫県教育委員会事務局義務教育課 指導主事

発行 兵庫県健康生活部環境政策局環境学習課  
TEL (078) 362 - 9895  
平成20年3月発行

19健P1 - 045A4